

これを見た伊佐比宿禰は、安心して弓の絃を弭させ、兵器をおさめて休息してゐる處へ、建振熊命は急ぎ髪の中から弓の絃を取り出ださせ、散々に矢を射かけたので、忍熊王の軍はひとたまりもなく敗亡し、逢坂山まで逃げて行つたが、こゝでまた激戦となつて、近江の國の沙々浪に於いて悉く滅ぼされてしまつた。

こゝに忍熊王はとても勝つべき見込みのないことを知り、伊佐比宿禰と共に船に乗り、海に浮んで歌を詠ませられた。

『うた、あざ』

ふるくまが 痛手負はずば

にほどりの あふみの海に

かづさせなわ』

とうたつて、共に海に落ち入つて死んでしまつた。

武内宿禰は、皇子を抱き參らせて、近江の國から若狭の國を廻り、越の國の敦賀に假宮を造つて、其處に皇子をお置き申した。其の地に御祀りしてある、伊奢沙和氣大神は、ある夜の夢に宿禰に御告げなされて、

『わが名を皇子の御名と易へては呉れぬか』

と仰せられた。宿禰は

『畏りました。仰せのまに／＼御名を御易へ申しませう』

と申し上げた。

すると大神は、

『しからは明日の朝濱邊に出て見られよ。名易の禮物を献げやう』

と御教へなされた。

翌朝早く濱邊へ行つて見ると、鼻の破れたる海豚は、浦にいつばいに浮んでゐ

た。

そこで皇子は宿禰に命ぜられて、

「大神はわたくしに御饌の魚を下されて、誠に右難う存じまする」と御禮を申し上げさせた。

しかるに其の海豚の鼻から流れた血が臭かつたので、其處の浦をば血浦と云つた。今では都奴賀（敦賀）と呼ぶやうになつた。

### 二四、阿度目の磯良

神功皇后は筑紫の國に御留りになられ、神々の御告げによつて新羅の國を御征伐なさらうと思し召され、高天原の神々を始め、八百萬の神達を悉く鹿島に聚めて、親しく御相談なされた。

多くの神々は皇后の御招きによつて、何れも鹿島に御集りになられたが、唯此

の島の海の神なる、阿度目の磯良ばかりは來なかつたので、諸々の神だけは、

「磯良は如何して來ないのだらう」

と不思議に思し召してゐられた。

神々は庭燎を燃いて、青和幣白和幣を賢木の枝に取り付け、歌をうたひ舞を舞うて神樂の遊びをされた、笛の音太鼓の響は、晴れたる夜の空に輝いてゐた月の都に澄みわたり、神々のえらぎ遊ぶ聲は如何にも神々しかつた。

すると突然あらはれた一人の神があつた。其の様は衣服の裾は破れて、いろい로운貝や海布藻草が體に着いてゐた。集つてゐられた神々は、あまりに汚い此の神を見て、誰の神であるか思ひ出せなかつたが、よく／＼見るとこれこそ磯良であつたので、

「あなたは如何してこんな變り果てた御姿になられたのか」と驚き問ひ給うた。

磯良は恥しげに、

「私は餘程早い頃から海の底に行つて、多くの魚と一所に住んでゐた。それで斯様に變り果てた姿になつたのだが、此の度皇后の御招きにも、あまりに醜い姿をして行くことが恥かしいので、行くまいと思つてゐたが、今あなたの方の奏でた神樂の音が、海の底まで聞えて來たので、あまりのなつかしさに、ちつとしてゐることが出來ず、恥かしさを忍んで出て來たのであります」と答へた。

そこで皇后は此の磯良の神に向つて、

「私はこれから、新羅の國を征伐するのでありますがついては海神の宮にある、潮乾潮珠満球の二つの寶玉を、何卒どあなたから御願ひして、頂いて下さりませぬか」と御願ひした磯良は、

「いやそれは御安いことです。これからすぐ行つて海神に申して來ませう」と其のまゝ海に沈んで行かれたが、すぐ浮んで來て、二つの寶玉を皇后の前に捧げた。

皇后は非常にお喜びなされて、兵船を整へ多くの神々の御先導によつて、新羅の海近く攻め寄せた。

新羅の王は見馴れぬ船が沖の方に見ゆるとの註進を聞いて、急いで兵を集め寄らば討たんと待ち構へて居た。そして又多くの兵船を出して海上の戦をせやうとされたが、皇后はかの潮乾珠を取り出して目の上に捧げると、其の處一面に浪が退いて陸地となつた。新羅の兵は急いで船より下り、ひし／＼と皇后の船に迫つて來たので、皇后は潮満珠を取り出して捧げると、今まで陸地であつた處は、何處からともなく大浪が寄せて來て青海原になつたので、新羅の軍勢は一人残らず溺れて死んでしまつた。

此の有様を陸にゐて眺めてゐた新羅の王は、心の中にいたく怖れて、  
「これは必ず神の遣はした軍勢であらう」  
と思ひ、すぐさま兜を脱いで皇后の前に降参してしまつた。  
此の二つの寶玉は肥前の國佐嘉郡の河上宮に納めたと傳へられてゐる。

二五、應神天皇

一 山城の矢河江姫

應神天皇はある時、山城の國の木幡村に行幸なされた。すると途中の路傍に花  
のやうに美しい少女が、天皇の御車の通るのを眺めてゐた。  
若き天皇は其の少女を御車近く召され、  
「少女よ、おん身は誰の娘であるか」  
とお尋ねなされた。少女は答へて、

「妾は丸邇比禮布能思富美が娘、名は宮主矢河江姫と申しまする」  
と云ふ。  
天皇は重ねて、  
「明日還幸におん身の家へ立ち寄るから、必ず待つて居られよ」  
と仰せられて、供奉の臣下を従へられ、しづ／＼と御車を進められた。  
少女は御車の後の見えなくなるまでたゞづんでゐたが、やがて家に歸ると此の  
由を父親に告げた。父親は大いに驚いて、  
「さては陛下の御目にとまられたか。かゝる賤の家に御出で下さるとは如何に  
も畏れ多いことである。娘よ、謹んでお仕へ申せ」  
と云つて、俄かに家の中を飾りつけ、海山の御饌を調へて待つてゐた。  
翌る日、天皇は供奉の臣下も多からず、御徴行の様で御出でになつた。  
さらぬだに美しき姫は身の光榮なる今日のことゝて、心して化粧をし、衣裳を

調へて待つて居たので、げに此の世のものと思はれぬ程あてやかであつた。やがて數々の御饌を並べて、姫は天皇に御盃を献げた。天皇は御盃をお取りになつて、お聲も高らかに、歌をお詠みになつた。

『此の蟹や何處の蟹、百傳ふ角鹿の蟹、

横去らふ何處に到る、いちぢ島み島に速來みほ鳥の潜さ息づき、坂路不平さ、波路を、健々と吾行せばや、小幡の路に遇はし、少女後手は小楯弓かも、齒列は椎實なす、

小井の丸邇坂の土を、初土は膚赤らけみ、下土は丹黒き故、三栗の其の中土を、頭衝く眞日にはあてず、眉書き濃に書きたれ、

遇はし、女、

彼もがとわが見し兒等、此くもがと吾が見し子に、

宴樂だに對ひ居るかも、い副ひ居るかも』

此の歌は、

『此の膳の上の此の蟹は何處の蟹か、越前の敦賀の蟹は横這ひになつて、近江の國へ越えて來たのであらう。朕も其の近江から來て、小幡の路傍でんと美しい少女に出逢て、其の少女のうしろ姿は、楯のやうにすらりとしてゐた。また其の齒並のきれいなことは、椎の實のやうに皎く光る。其の顔には丸邇坂の土、それは上土は赤く底土は赤黒いが、其の中土の色よいよ土をとつて眉ずみにして濃く書いてゐる、其の愛らしい少女に逢つた。

あゝもしたいと其の少女を思つた。かうもしたいと思つた其の少女に、今こそせめては酒宴の間なりとも、よく對き合つてゐたい。一緒に副つてゐた

』

かう云ふ歌である。

矢河江姫は後宮中に召されて、宇遲能若郎子と云ふ皇子を御生みなされた。

二日向の髪長姫

其の頃日向の國の諸縣君の娘に髪長姫と呼ぶ少女があつた。すぐれて美しいと云ふことを聞かれた天皇は、御妃になさらうと思し召して、御呼び寄せになられた。

ところが天皇の皇子の大雀命は、髪長姫の難波の港に着いたのを御覽になつて其の美しいさまを愛し給ひ、武内宿禰にお頼みになるやう、

『日向から御召しになつたあの髪長姫を。卿から父君に御願ひして、自分にはるやうに取り計らつて呉れ』と仰せられた。

宿禰は此のことを天皇に御願ひ申し上げると、早速御許しがあつて、其のまゝ大雀命に賜はつた。其の賜はつた様は、天皇は御酒宴を御開きになつて、髪長姫にお酒を注ぐ柏の葉を持たせて、大雀命に賜はつたのである。天皇は其の

時歌を御詠みになつた。

『よ、兒等野蒜摘みに 蒜摘みに朕行道の

かぐはし花橋は 上枝は鳥居枯らし

下枝は人取枯らし 三栗の中つ枝の

ほつもり紅少女を さよさ、ば宜しな』

『兒等をひき連れて、野蒜つみに出る道にある橋の、上の枝は鳥に荒され、下の枝は人に荒されて、中の枝ばかり花がある、その花の中にこもつてゐる實のやうなやさしい少女を、おん身が誘へば丁度似合ひである。さあ伴うて行けよ』

またお詠みなさるには、

『水たまる依網の池の 堰杙打ち

菱殻の刺ける知らに 葦線り延へけく知らに、

吾心し最をこにして 今ぞ悔しき』

『依網の池に堰の杖を打つものが、菱殻に刺されるのも知らずに、熱心に、またその足もとに延へまつはつて居る蓴菜の根のやうに、大雀が此の少女に心をかけてゐるとも知らずに、睨は少女を召すところであつた。今更くやしいやうな氣もする』

と戯れの歌など詠みになつて、髪長姫を下された。

大雀命は非常に喜んで、

『道の後巨田少女を雷のごと

きこそしかども相枕まく』

『九洲の奥の巨田の少女の名を、雷のやうに音高く聞いてゐるが、天皇の御思召しによつて、今はからずも一所に居ることが出来た』

またついで歌ふて、

『道の後巨田少女は争はず、  
寝しををしども愛はしみ思ふ』

『此の少女は自分に娶せられることをば、争はず否まず、私の云ふとほりになることの可愛いことよ』

大雀命は此の時立派な劔を佩びてゐられた。これを見た吉野の國栖の人民共は其の劔を賞めて、

『品陀の日の皇子 大雀大雀

佩かせる大刀、本劔、末振、冬木なす

からが下木の さやく』

『品陀の皇子大雀の命のお佩きになつてゐられる大刀は、まあなんと云ふ見事さだらう。本の方は兩刃の劔で、先は片刃になつてゐる。まるで冬の林の枯木の氷り堅まつた様に、物凄く牙えてゐるではないか』

又、吉野の白檜生に横白を作り、其の横白に酒を醸して献上した時、口鼓を鳴らし、國栖舞を舞つて歌ふやう、

「檜の生に横白を作り、横白に醸みし大御酒、

旨らに飲しもち食せ 吾君」

「檜の木原の中に、横白を作つて、其の横白につくつた酒を献じます。どうぞあしく召し上つて下さい。わが大君よ」

此の歌は、吉野の國栖どもが、朝廷に土地の産物を献上する時、いつでも歌ふ歌である。

二六、仁徳天皇

一 吉備の黒姫

仁徳天皇の皇后の石之姫と申す方は、甚だ嫉妬深くゐらせられた。それで天皇

の召し使ひの女などは、ひやみに天皇の御室に入られなかつた、少しのことでも皇后は足摩りをして騒ぎ立て、嫉妬をなさるのであつた。

其の頃吉備の國に吉備の黒姫と云ふ、器量のすぐれて美しい少女があつた。天皇は此の黒姫の美しいことを聞かれて、都に召し上せてお使ひになつたが、黒姫は皇后のはげしい嫉妬に恐れて、本國の吉備へ逃げて歸つてしまつた。天皇は高臺の上に御在でになつて、黒姫が乗つて居る船が、だん／＼に沖の方に離れて行くのを、遙に御覽なされてゐられたが、なつかしさに堪えず、

「沖邊には小舟連らく黒崎の

まさづこ吾妹國へ下らす」

「難波の沖に多くの小舟が連なつて行く、あゝあの船に乗つて、黒崎の黒姫、わがなつかしい妻は國へ歸つてしまふのだ」

皇后は此の歌を聞かせられ、妬ましさには堪へず



「誰かあの船を呼び戻して参れ」

と仰せられた、近臣の者共はばら／＼と御殿を出で、船に乗つて黒姫の船に追ひつき、

「皇后の命であります。何卒お船からお下り下さい」

と云つた、黒姫は致し方なく陸路を通つて歸つて往つた。

けれども天皇は黒姫を忘れることは出来なかつた。なつかしさは堪へず、ある時淡路島を見に行くと、皇后に云つて黒姫のもとへ御出でなされた。

黒姫は天皇の御出ましを非常に喜び、山方と云ふ處に天皇を迎へ入れて、いろ／＼な御饗をした。そして羹を煮てさし上げやうと、野邊へ出て青菜を摘んでゐると、天皇はふらりと其處に御出でになつて、姫と二人で楽しく御話しなされ、歌など御詠みになつた。

「山方に蒔ける青菜も吉備人と

共にし摘めば楽しくもあるか」

「山方に蒔いてある青菜を摘むと云ふつまらないしわざも、吉備人なる黒姫と共に摘んでゐると何より楽しい」

やがて天皇はつきぬ名残りを惜しませ給ひて、いよ／＼御還りなさることになつた。黒姫は天皇の御袖にすがつて、

「大和邊に西風吹きあげて雲離れ

退き居りともわれ忘れめや」

「西風が大和の方に吹き去つて、わが君が御還りになられ、空飛ぶ雲のやうに離れ／＼になつても、妾はなつかしいわが君を忘れませぬ」

又歌うて、

「大和邊に行くは誰が夫こもり水の

下よはへつゝ行くは誰が夫」

「大和の方へ行くは誰の夫であるか。あだかも地の下を潜る隠り水のやうに忍んで来て、今また忍んで御還りになられる。あああの氣の毒な方は、誰の夫であらうか。誰の夫でもない。妾のなつかしい／＼夫であるのだ」と別れを惜まれた。

二 八田若郎女

是れから數年後、皇后石之姬は、宮中で御宴會を御開きなさらうと思し召されそれに使ら御綱柏の葉を採りに、紀伊の國へ御出でになられた。其の御留守跡に、天皇は八田若郎女と云ふ美しい少女を、宮中に呼び入れて御寵愛なされてゐた。皇后はそんなことゝは少しも知り給はず、柏の葉を御船に積んで、難波の都へ御還りなさるゝ途中、宮中の召使ひの者が、自分の生れ故郷の吉備の國へ歸らうと、これも船に乗つて漕いで来たが、兵庫と難波との間の大波の海で、皇后の御供の船と逢ひ、

「天皇は此の頃八田若郎女を宮中に召されて、晝も夜も遊び戯れてゐられる。皇后はかうしてゆつくりしてゐられるが、此の事を御存じないのかしら」と話した、御供のものは此の事を皇后に申し上げると、皇后は大いに恨み怒つて、折角集められた御綱柏の葉を、ことごとく海中に投げ棄てしまつた。そして難波の港へ御着きなさらず、御船をば堀江まで浜らせ、淀河を上つて山城の國に御幸になられた。此の時の歌に、

「繼苗生や山城川を 川のぼり我のぼれば、河の邊におひ立てる さしぶを さしぶの木しが下に生ひ立てる 葉廣湯津眞椿

しが花の照りいまし しが葉の廣り座すは、大君ろかも」

「妬ましさは山城川を上つて此處まで来たものゝ。難波の都に座はすわが大君のなつかしさよ。此の河のほとりにさしぶの木が生へ、其の下に繁つてゐる葉の廣い椿、その椿の花のやうに照り輝き、其の葉のやうに廣く寛かであら

せらるゝわが大君、あゝなつかしいわが大君よ』  
と歌はせられ、それから山城から廻つて奈良の山口に到つて、またお歌を詠んだ。

「繼苗生や山城川を、宮土りわが上れば

青丹よし奈良を過ぎ、小楯大和を過ぎ

わが見が欲し國は 葛城高宮

吾家のあたり」

「妾は妬ましさのあまり、難波の都にも還らずに山城川を上り、奈良を過ぎ小楯大和を過ぎなどして、あちこちとさまようて居るものの、妾は何處をも見たいのではない、妾の見たいのは葛城の高宮の、そのわが家であるものを」  
から歌つてまた山城の國へ引き返へし、筒木と云ふ處にゐる、奴里能美と云ふ朝鮮の歸化人の家へ御入りになつた。

天皇は此のことを聞きし召され、鳥山と云ふ臣下を御遣はしになられ、皇后を御迎へ申させた。その時の歌に、

「山城にいしけ鳥山いしけ鳥山

吾が愛妻にししき會はんふも」

「山城へ早く行つて追ひつけよ鳥山、朕がいとしい妻に追ひついて會へよ鳥山」

また續いて丸邇臣口子と云ふものをお遣はしになられた。其の時の歌に、

「御室の其の高城なる大井子が原

大井子が原にある肝向ふ心をだにか

相思はずあらん」

「皇后は今高城の地に離れてゐるが、朕がかほどまで心配してゐるものを、それさへ思つて呉れないつれなさよ」

また

「繼苗生山城女の 小鍛持ち打ちし大根

根白の白腕 卷ずけば來そ

知らずとも言はめ」

「山城女が小さい鍛を持つて堀つた大根のやうな、其のまつ白い腕を枕とした  
ことがないのならばともかくも、今更知らぬなどと、そんなつれないことを  
云ふに及ぶまじ」

と御恨みになつた。

口子臣は山城の國の皇后のもとへ行つて此の歌を申し上げた時、雨が瀧のやう  
に降つた來た。口子臣はその雨の中にひれ伏して皇后に申し上げやうと、前の  
戸の方に伺候すると、皇后は後の戸の方へ行かれる。口子臣は後の戸へ廻はる  
と、皇后は前の戸に御いでになる。それで口子臣はあちらこちらと行き感ひして

庭に跪いて居る中に、雨はいよく降りしきり、庭の中に水が溜つて腰を浸す  
やうになつた。口子臣は其の時、紅い紐をつけた青い藍染の衣服を着てゐたの  
で、紅紐は雨水に濡れて紅が流れ出し、青い衣服は紅く染つてしまつた。口子  
臣の妹の白姫と云ふものは、皇后に仕へてゐたが、此の兄の状を眺めて悲しく  
思ひ、

「山城の筒木の宮に物申す

吾兄の君は涙ぐましも」

「山城の筒木の宮に來て、ものを申し上げてゐるわが兄の状を見れば、氣の毒  
で涙が流れて來る」

と歌を詠んだ。

この歌を皇后は聞かれて、

「口姫は何を悲しんでゐるのか」

とお問になつた。口姫は答へて、

「今あの雨の降る庭に水に浸つて畏つて居るのは、あれは私の兄の口子臣で御座います」

と申し上げた。

それから口子臣と口姫と奴理能美の三人は相談して、天皇にかう申し上げさせた。

「皇后の山城へ御出でになられたのは、奴理能美が飼うて居る蟲が、一度は匍ふ蟲になり、一度は卵となり、一度は飛ぶ鳥になつて三種に變はる珍しい蟲があるのので、それで御覽なされるために御出でになられたので、何も別に異つた御心はお有りなさらないので御座ります」

と申し上げさせたので、天皇は、

「それならば朕も見に行かう」

と仰せられて、難波の宮からお出ましになられ、山城の奴理能美が家に御入りなされた時、奴理能美は、其の飼つてゐる三種の蟲を皇后に献上した。天皇は皇后の御出なされる室の戸の前にお立ちになつて、

「繼苗生山城女の 小鍬持ち打ちし大根、

さわくくに汝が言へこそ 打ち渡す彌が榮えなす、

來入り參來れ」

「さわくくとおん身がことやかましく云ふので、大勢の供を連れてわざくこゝまで來るやうになつたのだ。もう大概にして御還りなさい」

と御歌を詠まれた。

皇后はそれから御機嫌がなほり、天皇と御車を同じくして御還へりになられたしかし天皇は八田若郎女を御忘れなされることは出來ず、御なつかしく思召されて、

「八田の一本菅は子もたず

立ちか荒れなむあたら菅原

言をこそ菅原と言はめ

あたら清し女」

「八田に生へてゐる一本の菅が、子も持たず茂りもせず、そのまゝ立ち枯れてしまふのは惜しい菅原である。

と言葉には菅原と云ふが、すがは美しいおん身のことである」

と御歌を御遣はしになつた。

八田若郎女は天皇の御心を忝けなく思ひ、

「八田の一本菅は獨り居りとも

大君しよしと聞こさば

獨り居りとも」

「妾は子を持たず一生一人で居りましても、わが父君さへ妾を御愛しみ下さる

ならば、少しも寂しいとは思ひませぬ」

と歌をもつて御答へ申し上げた。

天皇は八田若郎女の御名を永く傳へやうと思し召され、八田部と云ふ部落を、

攝津の國へ御定めになつた。

三 枯野の小舟

此の御代に、大和の國に非常に高く茂つた大木があつた。朝日が當る時には、

其の樹の影は淡路島まで届き、夕日が此の樹を照らす時には、河内の高安山を

越える程、大きな木であつた。それで此の附近の農民どもは、此の樹のために

田畑を耕すことが出来ない有様であつた。

仁徳天皇はこれを伐ることを命じ給うた。多くの人々は集つてやう／＼伐るこ

とが出来たので、これをもつて一艘の船を造らせ、これを「枯野」と命名し給

ふた。ところが此の船の船足は非常に早かつたので、朝夕淡路島へ清水を汲むための、宮中の御用船として用ゐてゐたが、年久しくなつたためにやうく腐れはてし、もはや海に浮べることは出来なくなつた。それで此の船を焼いて鹽を製造し、その焼け残りの木を取つて、一つの琴を作つたところが、其の琴の音は遠く七里に響いた。

それで天皇はお歌を詠ませられた。

「枯野を鹽に焼き 其が餘り琴に作り

掻き弾くや由良の門を 門中の海岩に

振り立つなづきの木の さわく」

「枯野と云ふ此の船を鹽を焼くに用ゐ、其の焼け残りを琴に造つて掻き鳴せば由良の海峡の中の岩に生へてゐる木に、浪が寄せかゝつたやうに、さわくと如何にもよい音がする」

二七、田道將軍の靈

仁徳天皇の御代に東國の蝦夷が叛いた。そこで天皇は御心をなやまされて、田道と云ふ英雄を將軍として蝦夷を征伐させた。

田道は軍勢を率ゐて遙々と東の國まで下つて行つた。そして目に餘る多勢の蝦夷と戦つたが、蝦夷は地理を知つてゐるばかりか、後から後からと援兵が来るので、さすがの田道も非常な敗戦をして、とうく伊寺の水門と云ふ所で討死をしてしまつた。

田道の従者は唯一人生き残つて、せめて最後の様を田道の妻に告げやうと、夜を日について、都に上り、田道が常に用ゐてゐた手纏を妻に與へて、こまくと物語りすると、田道の妻は悲しさのあまり縊くつて死んでしまつた。そして従者も主君の跡を追うて自殺をした。

この悲しき田道の物語を聞いた世の人は、田道を知ると知らざると何れも泣いて後を吊うた。

其の後、戦に勝ち誇つた蝦夷は到る處に亂暴を始めて、田道を葬つた墓を掘り返へした。するの墓の中から大蛇があらはれて、目を噴らして蝦夷を食うた。

蝦夷は此の大蛇の毒氣にあてられて一人残らず死んでしまつた。

それで當時の人は斯う云つてゐた。

『田道は既に死んでしまつたが、大蛇になつて讐を報ひた。これによつて見れば、たとへ死んだ人でも恨みを返へさずに置かないものである』

田道將軍は其の後、神に祀られて、立派な神社が今でも残つてゐる。

## 二八、縣守の淵

仁徳天皇の御時に、吉備の國川島河と云ふ河に、一疋の大蛟が棲んでゐた。此の蛟は時々往來に出ては道往く人々に毒氣を吐きかけて殺したので、吉備の國司は笠臣縣守と云ふ者に、此の蛟を殺して呉れるやうに頼んだ。縣守は剛勇無比の武士であつた。國司の依頼を快く承諾して、其の蛟の棲んでゐる、淵に行き三つの瓢を水に投げ入れて、

『この淵に棲める大蛟よ、汝はもし神であるならば吾の云ふことをようつく聞け。汝はこれまで毒氣を吐いて往來の人を苦しめた。これによつて今われは汝を殺さうと思つて來たのである。しかし汝は此の瓢を水に沈めることが出来れば助けてやらう。もし沈むることが出来なかつたら、必ず汝を殺してしまふぞ』

と大きい聲で怒鳴りたてた。

蛟は水の底にあつて此の事を聞き、忽ちの中に鹿に化つて陸に上つて來た。そ



してまた瓢を目がけて淵に飛び込み、一生懸命に沈めやうとあせつたが、どうしても沈まなかつた。此の様子を見てゐた縣守は、劔を抜いて水に躍り込み、蚊を殺してしまつた。そして淵の底の窟に陰れてゐた子蚊をも、悉く殺してしまつたので、河の水は血になつて流れた。それから後往來は安全になつた。淵の名を縣守の淵と呼んで、縣守の武勇を長く傳へるやうになつた。

二九、衣通姫

允恭天皇の皇后忍坂大中姫命の御妹に弟姫と申す方があつた。容貌はすぐれて世に比ひがなかつた。殊に其の艶麗しい肌の色が、衣裳の外に透き通つて照り輝いてゐたので、當時の人は此の姫を衣通姫と呼んでゐた。新しい宮殿が落成した春の一夜、天皇は文武の臣を集めて盛大な御宴を開かれ

た。皇后の大中姫は長き袂を翻して胡蝶の如く舞ひ、天皇は親ら琴を奏でさせ給うた。其の頃高貴の人の風習に、美人が起つて舞ひ、舞ひ收むれば主上に對する禮儀として、美しき女の献上を願ひ出づる定めであつたので、天皇は舞ひ終つた皇后に向はせられ、「よくこそ舞うた。さて誰人を献ずるか」と問はせられた。皇后は致し方なく、「妾が妹、弟姫を献上いたしたら御座ります」と申し上げた。天皇は大に喜ばせ給ひ、急ぎ烏賊津臣と云ふ者を遣はして衣通姫を召し出さるゝことゝなつた。

烏賊津臣は皇后の妬み深くてゐらるゝことを知つてゐたので、衣通姫はなかなか參内すまいと思つた。それでひそかに繻を懷中に隠して、近江の坂田にゐらるゝ衣通姫のもとへ行つた。

衣通姫は獨庭に下り立ちて、美しく咲ける草花を眺めて居られた。烏賊津臣は御側に近く寄つて天皇の詔を傳へた。

姫は身にあまる光榮を喜んだが、御姉君なる大中姫の嫉み深いことを思ひ召されて、なか／＼御承諾なさらなかつた。

烏賊津臣はそれから庭に畏つたまゝ、七日七夜の間動かなかつた。姫の御承諾を得るまでは歸るまいと思つたのである。そして懷からかの繻を出してひそかに喰べてゐた。

姫は忠義に凝つた、烏賊津臣の眞心に動かされて、とう／＼參内することゝなつた。

天皇は非常に喜ばせられ、直ぐにも宮中に召し出したいと思はれたが、皇后の御心をおもはれて、藤原の里に宮殿を造つて、其處に衣通姫を置くやうに取り計らはせた。

天皇はある時ひそかに藤原の宮に幸行し給うた。其の時衣通姫はたゞ一人ゐて、夕暮れの空を眺め入りつゝ、天皇を戀ひ慕ひ、

「わが夫が來べき宵なりさゝがにの

蜘蛛のふるまひ今宵しるしも」

と歌を詠んで淋しい想ひを洩らされてゐた。天皇はこれを知りて姫を愛し給うことが一層深くなつた。

姫は其の時天皇に申し上ぐるやう、

「妾はかうして皇居の近くに住んでゐて、夜も晝もわが君のことばかり慕うて居りまするが、皇后は妾の姉君でありますから、いつでもわが君を恨んでゐ

らるゝことと思ひます。それで妾は絶えず心苦しい日を送つて居ります。何卒どこよりも遠い處に住むことを御許し下さりませ」  
と御願ひ申したので、天皇は更に河内國の茅沼に宮殿を造つて、衣通姫を移しなされた。其の後天皇は狩獵にことよせて、しばしば茅沼の宮に行幸し給ひ、姫と逢ふ瀬をなつかしんでゐられた。  
ある時衣通姫は歌を詠ませられた。

「永久に君と遇へやもいさなとり

海のはまものよるときくを」

此の歌を天皇は御覽なされて、

「此の歌は決して他の人に聞かせてはならぬ。皇后はもしそれを聞いたならば恨むであらう」

と仰せられた。

それで當時の人達は濱藻を名付けて莫名乗藻と呼んでゐた。  
和歌の浦の玉津島の神は、此の衣通姫の靈を祀つたのだと云ひ傳へられてゐる。

### 三〇、海底の眞珠

允恭天皇はある時、淡路島に御狩し給ふたが、鹿や猪が山にも谷にも溢れる程多く遊んでゐたが、たゞの一疋も獲ることが出来なかつた。それで天皇は狩獵を止め給ひ、

「かく多くの獸が炎の如く起ち、蠅の如く騒いで群り遊ぶ此の島に、朕は狩りをして居るのに、一疋も獲させ給はぬは何れの神の御心でありますか」  
と占はせると、島の神が崇つて、

「これはわが心である。赤石の海の底に眞珠がある。その珠をもつて吾が前を

祀らせ給はゞ、必ず悉く獸を獲るやうにするであらう」と誨へ給うた。

天皇は乃ちところ／＼の漁人を悉く召し集めて、赤石の海の底を探らせられたが、水が深くて誰一人底まで行くことが出来なかつた。こゝに海人があつた。名を男狭磯と云つて、阿波の國の那賀の海人である。多くの海人にすぐれてよく底を探る者である。天皇は此の男狭磯を召して、

「汝は此の海に沈んで寶玉を探り來れよ」

と命じ給うた。

男狭磯は賤しき海人の身に、親しく天皇の優詔を拜したので、身の光榮と忝み人々に頼んで腰に繩を繫けてもらひ、海底めがけて飛び入つたが、暫あつて浮び出て、

「海の底に大なる蝮がおります。其の蝮のゐるところが光つて居ります

る」

と申し上げた。諸々の海人は聞いて聲を揃へ、

「島の神の請ひ給う眞珠は、必ず其の蝮の腹にあるであらう」と云つたので、勇敢なる男狭磯はまた海底深く沈んで行つた。

しばらくあつて其の蝮を抱いて浮んで來た。けれども其の時は男狭磯はすでに死んでゐた。繩を下して其の海底を測つて見ると、六十尋あつた。

天皇は其の蝮の腹を割かせて見給うと、果して眞珠があつた。大きさは桃の實のやうであつた。

此の眞珠をもつて島の神を祭り給ひて後、天皇はまた狩獵をし給うと、多くの獸を獲ることが出來た。

けれども天皇は男狭磯の死んだことを悲しみ給ひて、阿波の國に立派な墓を作つて、厚く葬らせ給うた。

三一、雄略天皇

一 忍齒王

雄略天皇は非常に剛勇英武の方であらせられた。

ある時近江の國の韓袋と云ふ者が天皇の許に、

「私の國の久多綿の蚊屋野と申す野原に、非常に多くの猪や鹿が居ます、其の群つた足はあたかも薄原のやうで、其の角は枯樹の林のやうで御座います」と申し上げた。

其の頃天皇はまだ皇太子であられたが、皇族の忍齒王と御一所にそこへ狩獵をするに御出になられ、其の蚊屋野と云ふ野原に、別々の狩屋を建て、御宿りになつた。

さて其の翌朝、まだ夜がはつきり明けぬうちに、忍齒王はたゞ一人御馬に乗つて

天皇の狩屋の近くにお出でになられ、供奉の者に向つて、

「皇子はまだ御目覺めにならないのか、もう夜が明けましたから、早く獵場へ御出でなされませと、申し上げよ」

と仰せられ、忍齒王はそのまゝ馬をすゝめて獵場へ御出でになつた。

供奉の者は天皇に此の由を申し上げると、御側に居た臣下の人々は、

「よからぬことを云ふ忍齒王のことで御座りますから、充分御要心なさりませ」

と申し上げた。

それで天皇は衣の下に鎧を着込み、弓矢を携へ、馬に乗つて御出掛けになり、忽ち忍齒王に追いつき、二人は馬を並べて御進みになつた。

そうしてゐる中に、天皇は隙をうかゞつて弓に矢を番へ、忍齒王を馬から射落し、すだくんに斬つて殺してしまつた。

忍齒王に二人の王子があつた。意富祁王と袁祁王と云つてまだ御若かつたが、父君が狩場で殺されたと聞いてたゞ二人逃げ出し、山城の國の荊羽井と云ふ處で辨當を食し上つてゐられた。すると顔に刑罰の跡のある汚い老人がつかくと傍に来て、

「おい其の辨當をよこせ」

と云つて奪ひ取つてしまつた。

二人の王子は大いに驚いて、其の老人に

「辨當は惜しくはないが汝は何者であるか」

と問はれた、老人は

「俺は山城で朝廷の猪を飼つてゐる者だ」

と答へた。

王子はそこから播磨の國へおいでになり、志自牟と云ふ者の家に、御自分等の

素性を隠して、馬飼ひ牛飼ひの賤しい仕事をして隠れてゐられた。

二 堅魚木の家

雄略天皇の皇后若日下王はまた河内の國に御在でになられた時、天皇は大和から捷路を取つて河内の國へ行幸し給うた。

そして、ある山に登つて四方を眺めて居られたが、屋根の棟に堅魚木を上げて作つた家があつた。當時天皇の宮殿でなければかゝる作り様をすることが出来なかつたのである。それで天皇は其の家を御覽になられ、

「あの堅魚木を上げてあるのは、誰の家か」

と問はせられた。

「あれは志幾の大縣主の家で御座りまする」

と供奉の者は天皇の御顔色をうかゞひ、おそろしく申し上ぐると、

「奴にして己が家を天皇の宮殿に似せて作つてゐるとは無禮な奴である」

と仰せられ、すぐさま人を遣はして其の家を焼き拂はせられやうとした。すると大縣主はいたく恐れ畏みて天皇の御前に出て、謹んで申すやう、

「賤しい奴のことゝて何事も存ぜず、あやまつてかやうな家をこしらへました。何卒を御許しなされて下されませ」

と頭を地につけて謝り、謝罪の献上物として、白犬に布を懸け鈴を付けて、自分の親族の腰佩きと云ふ男に、犬の綱を扱かせて献上した。それで天皇はやうく御許しなされ、火を放くことを止めさせられた。

天皇はそれから皇后のもとへ御出でになられた。そして彼の犬を贈らせられ、

「これは今日途中で手に入れた珍しい物であるから、進物にする」と供奉の者に言はしめられると、皇后は

「わが君は今日日を背にして御出でになられたのが、甚だ恐れ多う御座りますから、今日はお目にかゝらずに、妾の方からすぐに参りまして御仕へ申

しまする」

と人をもつて申し上げられた。

それで天皇は御還幸りなられたが、途中日下山の坂の上に立ち止つて、歌をお詠みなされた。

「日下部の此方の山と、疊薦平群の山の

此方くの山の峽に、立榮ゆる葉廣熊櫓

本方にはいくみ竹生ひ、末方にはたしみ竹生ひ、

いくみ竹いくみは寝ず、たしみ竹たしには率寝ず

後も組み寝む其の思ひ妻あはれ」

そして此のお歌を皇后のもとへ御遣はしになられた。

三 一言主大神

天皇はある時葛城山にお登りになつた。供奉の人々は皆紅紐のついた青摺の着

物を拜領して着た。其の時向ふの山の麓からも山の上に登る人があつた。其の状は丁度天皇の行列のやうで、裝束から、供奉の人々までよく似て、どちらがほんたうの天皇であるか分らない程であつた。

天皇はそれを御覽になつて、

「此の倭の國には朕の外に天皇はない筈であるに、其様して行くのは何者であるか」

と問はしめられた。すると向ふの答ることも、天皇の仰せられた通りであつた。

天皇は非常に御怒りになられ、供奉の百官と共にことごとく弓に矢を番へられた。するとまた向ふの人々も同様に矢を番へた。

そこで天皇はかう問はしめられた。

「汝は何者であるか、先づ名を名乗れ。各々名を名乗つて後矢を放さう」  
向ふの人はこれに答へて申すには、

「しからば名を名乗らん。吾は惡事も一言、善事も一言、言離の神、葛城の一言主の大神である」

と答へた。これを聞かれて天皇は謹んで申すやう、

「さては大御神でゐらせられましたか。大御神がかく御神體を現はし給うとは、まことに思ひよらないことでありました」

と仰せられ、大刀弓矢を始め、供奉の百官の青摺の衣をも脱がせ、伏し拜んで献上すると、一言主神は手を打つて喜び、その献上物を受けさせられた。そして天皇の御還幸の時に、大神は山を降つて御見送りなされた。

一言主神が神體を現はされたのは此の時が最初である。

四 采女の歌

天皇はある時、枝葉の茂つた槻の大木の下で御酒宴を御開きになつた。文武の百官は左右に居流れて、皇后もお側にゐられた。



此の時伊勢の國の采女は、御盞を捧げて来て天皇に献つたが、槻の葉が風に散つて盞に浮いた。采女はそれと氣も付かず、なほも御酒を献つた。

天皇は盞に浮いてゐる葉を御覽になつて、かつと怒り給ひ、采女を取つて押へ、御刀を頸にあて、あはや斬り殺さうとなされた。采女は聲を上げて、

「何卒ぞ御許し下されませ。わが君、妾は申し上げたいことが御座ります」と云つて歌をうたつた、

「纏向の日代の宮は 朝日の日照る宮  
夕日の日耀ける宮 竹の根の根足る宮  
木の根の根ばふ宮 八百土よしい築の宮  
眞木裂く檜の御門 新嘗屋に生ひ立てる  
百足る槻が枝は 上枝は天を覆へり、  
中枝は東を覆へり 下枝は鄙を覆へり

上枝の枝の末葉は 中枝に落ち觸はへ  
中枝の枝の末葉は 下枝に落ち觸はへ  
下枝の枝の末葉は あり衣の三重の子が  
捧がせる瑞玉盃に 浮きし脂落ち浸つさひ  
皆疑々に是しも甚にかしこし 高光る日の皇子  
事の語言も此をば」

「纏向の日代の宮は、朝日夕日が照り耀き、堅い地盤の上に堅固に建てられた御殿である。其の天皇の新嘗さこしめす御殿の外に、大きな槻の樹が聳えて居て、上の枝は天を覆ひ、中の枝は東の國を覆ひ、下枝は西の方の地方を覆うてゐる。そして上の枝の葉は落ちて中の枝にかゝり、中の枝の落葉は下の枝にかゝる。その下枝の葉は落ちて三重の子の妾が捧げてゐる、玉の御盞に浮いた。そしてその浮いた光景は、遠い神代の昔の天地の初めの時、此の世界は

宛も浮脂のやうであつたと云ふ、其の時のやうでもあり、また伊邪那岐伊邪那美の二柱の神達が、國々を生みなさる時、矛をもつて潮こほろくに掻き給うたと云ふ、其の時の姿がとも思はれて、まことに目出度いことゝ心得ます。そして此の事は永く後の世の語り草になりますでせう」

采女はかう云ふ故い事などを引いて、面白く歌をうたつたので、天皇は御心を和げ采女をお助けなされた。

皇后はさき程より非常に御心配してゐられたが、此の有様を御覧になつて、

『大和の此の高市に 小高る市の堆』

新嘗屋に生ひ立てる 葉廣五百津真椿

そが葉の廣りいさし 其が花の照りいます、

高光る日の御子に 豊御酒献まつらせ

事の語ごとく此をば』

『大和の此の高市の高いところに、葉の廣い椿が茂つてゐる。その葉の廣いやうに、天皇の御心が廣く、その花の美しく照り輝いてゐるやうな御心をもつて、三重の采女の罪を御許しになつた、尊い日の御子なるわが君に、此の大御酒をお献げ申せよ。そして此の事は後の世までも永く語り傳へることであらう』

と歌を御詠みなされた。

天皇は御心ますます麗はしくなり給へ、歌を御詠みになつた。

『百敷の大宮人は 鶉鳥願布とり掛けて

鶉尾行さ合へ 庭雀群ずまりゐて

今日もかも酒みづくらし 高光る日の宮人

事の語ごとく此をば』

『多くの宮中の者共が願布をとり掛けて、鶉鳥のやうに群れ遊び、まだ庭雀の

集つたやうに群つて、今日の一日を楽しく皆酒びたしになるであらう」  
此の三つの歌は天語歌と云つて、後の世に酒宴の餘興にうたふ歌である。  
三重の采女は此の時天皇から御賞めにあづかり、いろ／＼な賜物をいたゞいた。

五 蜻蛉野

天皇は狩獵を御好きであつた。それである時、大和の國の阿岐豆野に狩獵をなさるに御出でになられ、椅子に掛けてゐらるゝと、一疋の蛇が飛んで来て天皇のお腕に喰ひついた。するとまた一疋の蜻蛉が飛んで来て、その蛇を食つたまゝ飛び去つた。それで天皇は歌をお詠みになつた。

「三吉野の小室が嶽に猪伏すと

誰ぞ 大前に申す  
安見しゝわが大君の 猪待つと胡床に座し

下は御歌は天皇  
イはなないた  
三吉野を歌ふて  
はなをのりてを遊ばし

白妙の袖着そなふ 手舂に蛇かきつき  
其の蛇を蜻蛉早喰ひ 此くの如名に負はむと  
虚空みつ大和の國を 蜻蛉州とふ」  
「三吉野の小室が嶽に猪が多くゐると申して来たものがあつた。朕はそれを狩りに来て、猪を待つうち胡床に掛けてゐると、腕に蛇が掻きついた。すると其の蛇を一疋の蜻蛉が飛んで来て、早くも喰つてしまつた。かやうに忠義を立てる虫の名につけやうとして、わが日本の國を蜻蛉州と云ふのであらう」  
それから其の野原を阿岐豆野と云ふやうになつた。

三二一、三輪の赤猪子

雄略天皇はある春の日に、大和の國の三輪河のほとりを御散步あらせられた。ゆるやかに流るゝ春の水に、今を盛りと咲き狂ひし花が二つ三つ散つて、野も

山も遠く霞んで、薄衣をひいたやうであつた。

すると其の河の岸に着物を洗つてゐた少女があつた。化粧せぬ姿は殊の外あてやかであつたので、天皇はつか／＼と傍により添ひ、

「少女よおん身は誰の娘であるか」

と問はせられた。

少女はかゝる尊き人であるとも心付かず、いと無雑作に、

「妾は引田部の赤猪子と申すもので御座ります」

と申し上げた。

天皇は、

「何れ宮仕へさせやう程に、嫁いらすにゐられよ」

と仰せられて御還りになつた。

赤猪子をはじめて天皇であることを知つた。そして身の光榮を打ち喜び、ひた

すら天皇の御召しを待つてゐたが、春は逝き夏は過ぎて其の年も暮れはてたが何の御沙汰もない。花は咲き葉は散つて數年は夢の如く過ぎた。赤猪子はそれでもなほ待つてゐた。

十年二十年、多くの寂しい年月は流るゝ如く過ぎ去つて、赤猪子の花の姿も何時しか變りはて、丈なすくろ髪に霜を見るやうになつた。

赤猪子つく／＼思ふやう、

「かうして妾は何十年も待つてゐた。今見る影もなく老しほれてしまつたが、せめて今まで嫁入らずに御召しを待つてゐた、此の真心なりとも申し上げねばならない」

と、ある日珍らしき數々の産物を携へて、宮中にその献上を願ひ出でた。

天皆はかゝることゝは少しも御存じなく、まして昔のことなどはすつかり忘れはて、赤猪子に問はせ給うやう。

「汝は何と云ふ老女であるか。またどういふわけで参つたのか」と御尋ねになつた。

赤猪子は天皇の御聲を聞いてなつかしさに堪へず、

「わが君にはすでに御忘れなされましたか。妾は引田部の赤猪子と申すもので御座ります。今から數十年の昔、妾はまだ少女でありました。其の時わが君には三輪河のほとりに御出でになられ、賤しい妾に身にあまる御言葉は賜はりました。妾はそれからながい間わが君の御召しのみ待つて、たゞ一人寂しい月日を送つて來ました。今はかやうに容姿も衰へはて、見る影もなくなりましたので、最早や御召し使ひを願ふのではありませぬが、せめて此のながい間御待ち申してゐた志だけを申し上げやうと、かくははる／＼参つたので御座いまする」と申し上げた。天皇は非常に驚かせられ、

「朕はもう其の事は忘れてゐたのに、汝はよくも約束を守つてゐた。ながい間さぞ情ないことと恨んでゐたであらう。」と御慰めになつた。そして御歌を賜はつた。

「御諸のいつ程が本 程が本ゆゑしさかもかしはら少女」

「引田の若栗栖原わかへに 卒寝てましを老いにけるかも」

赤猪子は堪へかねて泣いた。其の涙に衣服の袖がしと／＼に濡れた。やがて涙をはらつて御返へしの歌を献つた。

「御諸につくや玉籬齋さあまし 誰にかも依らむ神の宮人」

「日下江の入江の蓮花蓮 みの盛り人ともしきろかも」

此の歌のやうに、赤猪子はこれまでひたすら天皇の御召しのみ待つてゐたが、盛りを過ぎてしまつた今となつては、これから先をどうして過していかかわからなかつた。

天皇は可愛想に思し召され、いろ／＼な賜物を下されて、故郷へ御返へしになつた。

三三二、 栲幡皇女

雄略天皇の御息女に栲幡皇女と申す方があつた。御姿がすぐれて麗はしいばかりでなく、御心もやさしい方であつたので、天皇は皇女を伊勢大神宮に仕へさせ給うた。

しかるに、阿閉臣國見と云ふ邪心深い者があつて、此の皇女を恨みまつり、また五百木部連武彦と云ふ者をも恨んで、

「武彦は栲幡姫を犯しまつり、姫はすでに妊んでおられる」と言ひふらして歩いた。

武彦が父の枳莒噲は武士氣質のものであつたから、これを聞いて非常に驚き、

もし天皇が此のことを御聞きなされると、剛勇の君であらせられるから、必ず武彦を殺し給うであらう。そしてわれも亦武彦の父であるから、免れることは出来まい、かう思つたので、早く武彦を殺してしまふと思ひ定め、武彦を欺いて、鞆飼をすると云つて河に連れ行き、武彦が油断を見すまして、とう／＼殺してしまつた。そして天皇にかくと奏上した。天皇はこれを御聞きなされて、栲幡姫をば伊勢の國から呼びよせ給うた。そして此のことをお問ひなされると、姫は大いに驚かせ給うて、

「何事も存じませぬ」と答へられた。

姫はかゝる噂をたてられたことを、非常に愧ぢ給ひ、ある夜一つの鏡をいだいて、ひそかに宮殿を立ち出で、伊勢の國の五十鈴の河上に到り給ひ、人の通らぬひまを見て、鏡をば其處に埋め、小さい刀をもつて御頸を刺して自害してしま

はれた。

姫の御姿が見え給はぬので、天皇は大いに驚かせられ、其の夜の中に人を四方に遣はして、探し求めさせられたが、其の中のある人々は、五十鈴河のほとりに沿うて探してゐた。すると、河上にあたつて大蛇の立つたる如く、四五丈もあらうと云ふ美しい虹が立ちのぼつて居た。人々は怪しみて其の虹の立ちのぼつてゐる地を掘つて見ると、姫が常に肌身はなすぬ鏡が出た。そこから少し行くと姫の御死骸があつた。

天皇は姫の死に給へることを深く嘆かせられたが、なほも正さんと思し召されて、人をして其の御體を割かせて見給うた。すると御腹の中に水の如く清く澄んだものがあつた。そして其の水の中に一つの石があつた。これによつて栲幡姫は罪がなくて死に給ひしことを知り、天皇は厚く葬らせ給うた。

また武彦が父の枳莒噲は、姫の御體が清くてあつたことを聞いて、子の武彦に

罪がなかつたことを知つたけれども、過つて自分の子を殺したことを後悔して、かの憎むべき國見を殺して仇を報ひやうと思つたが、國見は早くも此の事を知り、石上神宮に逃げて匿れたので、枳莒噲は仇を報いることは出来なかつた。

三四、文石小磨狗となる

雄略天皇の御時に、播磨の國に文石小磨と云ふ者があつた。力強く心健くて、悪しき行を好み、恣に人を殺して物を奪ひ取つてゐたので、道行く人は恐れ通らず、海を渡る船も恐れ渡らなかつた。また國法を背いて調貢をも奉らなかつた。

播磨の國の司は、此のことを朝廷に申し上げると、天皇は大いに怒り給ひて、春日の小野臣大樹と云ふ者に、猛き兵卒を多く率へさせて、小磨を征伐せしめ給うた。

大樹は兵卒に命じて、手に手に炬火を持たせ、小鷹が家を十重二十重に取り圍ま  
せて、焼討ちの戦をした。小鷹が家は忽ちの中に猛火に包まれてしまつた。  
其の時、火炎の中から大きさは馬の如き、一疋の白狗が躍り出て、大樹を目掛け  
てかゝつて來た。大樹は少しも畏れず、刀を抜いて其の狗を斬ると、白狗は忽  
ち小鷹と化つて倒れたと云ふ。

三五、伯孫と土馬

雄略天皇の御時に、河内の國古市郡に加龍と云ふ者があつた。加龍が妻は飛鳥  
戸郡の伯孫と云ふ者の女である。

ある時、加龍が妻は兒を生んだので、伯孫はかねて自分の子のやうにいたはつ  
てゐた名馬に乗つて、聾なる加龍の家へ往き、賀詞を述べて歸ると、もう日は  
暮れてしまつて、月はあかるく輝いてゐた。

伯孫は馬に鞭打つて應神天皇の御陵のほとりを過ぎると、赤馬に乗つて來るも  
のに遇つた。伯孫はふと其の馬を見ると、龍馬とでも云ひたいやうな駿馬であ  
つたので、馬好きの伯孫は自分の馬に鞭を加へて、其の後を追ひかけて見たが  
とても及ぶことは出来なかつた。伯孫はどうかしてあの馬を得たいものだと思  
へてゐたが、其の赤馬に乗つた男は伯孫の心を知つて馬をとどめ、  
『あなたの馬とこれと取り替へませうか』  
と云つた。

伯孫は夢ではないかと喜んで、厚く其の男に禮を述べて自分の家に歸り、厩に  
入れて鞍を解き、秣を與へて寝てしまつた。

夜の明けるのを待ちかねた伯孫は、朝早く起きて昨夜の駿馬を見やうと思ひ、  
急ぎ厩に行つて見ると、其の馬は何時の間にか土馬に化つてゐた。

伯孫は大いに驚いて、昨夜通つた應神天皇の御陵のところへ行つて見ると、自



分の馬は御陵の周圍に立つてゐる、十馬の中に交つて立つてゐた。  
伯孫は重ねくの不思議に、自分の馬を連れ歸り、かの土馬をば御陵のほとりに立て、置いた。

三六、浦の嶼子

丹後の國與謝郡日置の里に筒川村と云ふところがある。此の村に雄略天皇の頃に三河の筒川の嶼子と云ふ者があつた。姿容が美しくみやびやかなことは世に稀ひなかつた。後の世に水江の浦の嶼子と云ひ傳へたのは、此の者のことである。

ある日嶼子は獨り小さい船に乗つて海に漕ぎ出し、心静かに釣をしてゐたが、どうしたものか、三日三晩を暮しても、たゞの一疋の魚も釣れなかつた。嶼子はあまりに釣れないので馬鹿々しく思つて居ると、釣竿は折れるやうに強

く引かれたので、驚いて上げて見ると、世にも不思議な龜がかゝつてゐた。其の龜は甲羅が五色に輝いて、目も眩むる程美しかつた。嶼子は怪しく思つて龜を船の中に置いたが、うつら／＼と眠くなつたので、舷を枕にし、しばし眠つて居た。すると耳もとで、

『もし／＼』

とゆり起す聲が聞えたので、驚いて目をさすと、先きに釣り上げた龜の子は消えるやうに失くなつて、船の中に此の世のものと思はれぬ程美しい、一人の少女が立つてゐた。

嶼子は少女を見て、

『かやうに里を遠く離れたる海の中に、あなたは如何して來たのか』  
と問うと、少女は答へて、

「あなたは此の廣い海の中に、唯一人ゐるのを見て、さぞ寂しいことだらうと思ひ、慰めに來たのです」と云ふ。

「何處から御出でなされたのか」と聞くと、

「妾は常世の國から參りました。そんなに疑はずに、少し御話しやうではありませぬか」と云ふ。

嶋子は聞いて、此の少女は必ず神様であらうと思つて恐れてゐた。其の時少女は嶋子に向つて、

「妾はあなたと夫婦になつて長く暮したいと思ひますが、あなたは如何ですか」

と問ふた。嶋子はなほも恐れて、  
「私はなんとも答へることは出来ませぬ」と云ふと、少女は  
「そんならばこれから一所に常世の國へ參りませう」と云つた。

嶋子は少女の云ふまゝに、暫し眼を閉ぢてゐると、忽ち大きな島に着いた。其の島は玉を敷きつめたやうに美しく、高い宮殿は空に聳えてゐた。少女は其の中の最も立派な宮殿の門に導いて、

「しばらくここで御待ち下さい」

と云つて奥へ入つて行つた。すると間もなく童子が出て來て嶋子を見て、

「龜比賣の夫が來ました」

と云つたので、少女の名を龜比賣と云ふことを知つた。

そうしてゐるうちに、龜比賣は出て来て、嶋子を喚び入れると、奥の一間には龜比賣の父母や兄妹が皆集つてゐて、嶋子を迎へ入れ、いろ／＼な珍しい御馳走を供へて酒をすゝめ、歌をうたつたり、舞を舞うたりして喜び遊んだ。其の様は人の世の状と異つて、いかにも風雅やかなものであつた。かくて日もやう／＼暮れはたので、集つたもの共は皆歸つて行つた。それから龜比賣は一人残つて、嶋子と夫婦となつた。嶋子は常世の國に居て龜比賣と夫婦となつてうか／＼と暮してゐる内に、早くも三年の月日が過ぎ去つた。嶋子は此の頃しきりに父母の事を想ひ出すやうになつた。そして嘆き悲しむことが日に滋くなつた。龜比賣はこれを心配して、

「あなたは何故そんなに嘆いてゐるのですか」と問うた。嶋子は

「私は此の頃しきりに父母の國のことが思ひ出されるので、かうして嘆いてゐるのです」と答へた。

「そんならあなたはお國へお歸りなさいたいのですか」と問うた、

「何卒か今一度父母に逢ひたいと思ひます」と答へた。

龜比賣はこれ聞いてほろ／＼と涙を流して泣いた。そして

「あなたは妾と何時までも暮すつもりで御出でになられたのでありませぬか、それに今どうして御歸りなさらうと思し召すのですか」と云つて泣き悲しんだ。龜比賣の父母や兄妹共も、此の有様を見て何れも泣いた。

けれども喚子の心はどうしても動かなかった。龜比賣は致し方なく、

「それ程までに御歸りなさりたいのならば、最早も留めいたしませぬ」と云つて、美しい玉で飾られた手匣を渡し、

「妾のことを御忘れなされないなら、何卒此匣を開けないで下さる」としみじみ名残りを惜しんで、船に乗せ、

「しばらくの間眼をふさいで居なさい」と云つた。

喚子はふと眼を開いて見ると、こゝは丹後の國筒川の里であつた。あたりを見廻はすと、家の状も人の様子も悉く變つて、知らぬ他國に來たやうに、何處を如何尋ねていゝかわからかつた。

喚子は道を通る人に、

「水江の浦の喚子が家は何處で御座りませうか」

と問うと、其の人は不思議そうな顔をして、

「あなたは何處から御出でになられて、かやうな昔の人のことを御尋ねなされるのですか。昔此の里に水江の浦の喚子と云ふ者があつて、ある日海に釣をしに行かれたが、そのまゝとらゝ歸らないと云ふことを聞いてゐますが、其の時からもう三百年も過ぎてゐます。あなたは何故こんな昔の人のことをお尋ねなされるのですか」

と云つた。喚子はこれ聞いてどうしてもほんたうとは思へなかつた。そして方々を廻つて尋ねて歩いたが、どうしても尋ねあてることが出来なかつた。その間に多くの日を暮した。

喚子はふと龜比賣のことを思ひ出した。そしてかの匣を撫でてゐたが、龜比賣に云はれたことも忘れて、其の匣の紐を解き、蓋を取つて中を覗くと、白い雲のやうなものがゆら／＼と中から立ち登つて、空に消えてしまつた。そのため

に常世の國との途は全く塞がれてしまつて、喚子は一人此の國へ取り残され

た。喚子は、にはかに龜比賣を戀ひ慕はしくなつた。けれどもかの匣を開けたために、とても龜比賣と逢うことが出来なくなつたことを知り、涙を流して嘆き

悲しんだ。そして海邊に出て歌をうたつてゐた。

「常世邊に雲立ちわたる水江の浦島の子がこもらわたる」

これ聞いた龜比賣は、遙かに喚子の方を望んで、

「大倭邊に風吹きあげてくもばなれ

そきをりともよ妻を忘らすな」

と歌つた。喚子はなほもなつかしさに堪えず、

「こらにこひ朝戸を開き吾が居れば

常世の濱の浪の音さこゆ

此の喚子は、常世の國に三年居つたと思つたのが、早くも三百年を過ぎてしまつたのである。

三七、顯宗天皇

一 王子の名乗

山部の連小楯と云ふ人は、播磨の國を治むる命を受けて、其の國の志自牟と云ふ者の新築の家で酒宴を開いた。酒酣に及んで人々は興に乗つてしきりに唄つたり舞つたりした。そして家中の者共に悉く舞はせることになつた。其の時に竈の傍にゐて此の賑やかな狀を眺めてゐた、二人の火焚き童があつた。志自牟は此の二人にも、是非舞へと云つたので、弟は兄に對つて、先に舞ひなさいと云ひ、兄は弟に、お前先に舞へと云つて、互に譲り合ふ様子がをかしいと

云つて、人々はまた手を拍つて笑ひ興じた。

とうとう兄の方が先に舞ふことになり、兄が終つてから弟が舞はうとする時、まづ聲高らかに名乗るやう、

「物部の我が夫子が、取り佩ける太刀の柄に丹かきつけ其の緒には、赤幡をたち赤幡立て、見ゆればい隠る。山のみをの竹を本かき切り、末押なびかす魚簀、八絃琴を調べたる如天の下を治め賜ひし、伊邪本別天皇の御子市邊の忍齒王の奴御末」

「立派な壯男が太刀の柄に紅い飾りをし、太刀の柄に赤い布片をつけ、如何にも目立つ姿のものさへ、隠れて見えないほど茂つてゐる竹叢。その竹を伐り列べて作つた、八絃琴を調べ整へたやうに天下を治め整へさせられた、伊邪本別の天皇の御子の市邊忍齒王の子孫であるぞ、われは」と云つた。

これを聞いた小楯の連は大いに驚き、床から轉げ降りて、家中の人々を追ひ出し、二人の王子を左右の膝にも乗せ申して悲しんだ。そして直ぐ様人民を集めて假宮を作らせ、そこに御移し申し上げた。

此の時、清寧天皇が御崩れになつて、皇子があらせられなかつたので、忍齒王の御妹の飯豊王が天下を御治めなされてゐたので、小楯の連は急ぎ早馬の使を遣はして、此のことを飯豊王に申し上げた。

伯母君の飯豊王は大層御歡びになり、角刺の宮にお呼び寄せになつた。此の二人の火焚き童は、意富祁王と袁祁王であつたのである。二人の王子は互に皇位に即くことを譲りあひ給うた。意富祁王は弟の王に向つて、

「私達が播摩の志自牟が家に居た時、もしおん身が名乗らなかつたら、天下を治むる天皇となることはなかつたらうもの、今かうなつたのも皆おん身の功である。自分は兄に生れては居るが、とにかくおん身は先に天下をお治めなされ」

と堅く御譲りになつたから辭みかねて、とう／＼袁祁王が天下を治めさせられることゝなつた。これを顯宗天皇と申し上げる。

天皇は昔父君の災難に遇つてお逃げになつた時、山城で猪飼の老人のために辨當を奪ひ取られたことがあつた。

天皇は其の時のことを思ひ出され、かの老人を探し出して、大和の飛鳥川の河原で斬罪に處し、其の一族の膝の筋を断らせられた。それで其の子孫が大和の都に上る時には、跛の眞似をして來るやうになつた。

二 戀の歌垣

意富祁袁祁の二王子が、播摩の國から伯母君の飯豐王の許に御還りになつてゐられた時、平群の臣の先祖の志毘臣と云ふ人が、歌垣に立つて、袁祁王が御召しなさらうとしてゐる少女の手を取つた。(歌垣とは男女が集つて歌を歌ひ交はす遊びである)。其の少女は大魚と云ふ名であつた。

此の時、袁祁王も歌垣の仲に御在でになつたが、志毘は袁祁王を見て歌をうたつた。

「大宮のをとつはたで隅傾けり」

「御殿の屋根の隅が傾いてゐる。そのやうに袁祁王はたゞ一人しよんぼり立つてゐる」

斯う歌つて歌の結を乞うた。そこで袁祁王は

「大工匠おぢなみこそ隅かたぶけれ」

「大工が下手なので傾いたのだ」とお歌ひになつた。

志毘はまた歌ふ。

「大君の心をゆらみ 臣の子の八重の柴垣入り立たずあり」

「如何に王子が心にあせられても、わが八重に結んだ堅固な柴垣には入れない。

そのやうに私と大漁との仲を妨げることは出来なう  
王子はまた歌ふ。

「しほ瀬のなをりを見れば 遊び来る鮪が鱈手妾立てり見ゆ」

「潮の流れの浪の高いところを見れば、鮪が泳いで来る。鮪の傍にその妻が立つてゐる」

これを聞いた志毘臣はますます怒つて、

「大君の王の柴垣 やふじまりしまり廻し截れん柴垣焼けむ柴垣」

「大君の柴垣がいかにも嚴重に緊め廻してあつても、必ず截つて見せう、焼いても見せう。其の如く、王子はたとへ此の少女を得て、如何に堅く守つて居ても、きつと取り返へして見せる」

と歌つた、王子も亦歌はせられる。

「大魚よし鮪衝く海人よ 其が有れば心こほしけむ 鮪衝鮪」

「鮪を衝く海人、鮪にはさういふ恐いものがある、おまへは悲しからう」  
かうして歌ひ争つてゐる中に、夜はほのくくと明けて、あたりをた人もそれく歸つてしまつた。王子も志毘臣も還られた。  
翌朝、角刺宮で意富祁王と袁祁王と御相談なされるには、  
「朝廷の人等は朝は朝廷に参り、晝は志毘臣が家に集つてゐる。今は丁度志毘臣は寝てゐるであらう。門番も誰も居るまい、機會は今である」  
と急いで兵を集め、志毘臣の家を取り圍み、とうとう志毘臣をば殺してしまはれた。

三八、農夫と雷電

敏達天皇の御時、尾張の國のある農夫が、夏の日に田を廻つてゐると、俄に空が掻き曇つて雷電鳴り響き、雨が篠つくばかりに降つて來た。農夫はとある樹



の下に立ち寄つて、暫し雨を避けてゐると、天地も崩るゝばかりに裂しい音がして、雷が農夫の立つてゐる前に落ちて來た。其の形は丁度童子のやうであつた。

農夫は怖しくもあつたので、鋤をもつて雷を打ち殺さうとすると、雷は畏れて、

「何卒私を殺し給ふな。私はあなたを殺さうと云ふ者ではありませぬ。もし私を助けて下されば、後で必ず御禮を致しませう」

と御願ひした。農夫は聞いて、

「何を御禮すると云ふのか」

と問ふと、

「あなたに不思議な小兒を生ませませう。もし立派な小兒が生れたら、それは私が御禮のために生ませたのだと云ふことを御悟り下さい。またもう一つの御願は、私に楠の木を一つ作つて、其の中に水を満たし、それに笹の葉を浮

べて下さい」

と云つた。

農夫は雷の願ひのとほり、楠船を作りそれに水をいっぱい盛り、笹の葉を浮べて與へてやると、雷は大いに喜び、厚く禮を述べて。そのまゝ大空に昇つて行つた。

かくて三月ばかり経つてから、農夫の妻が妊娠になつた。そして月満ちて生んだのは立派な男の子であつたが、此の兒は世間の小兒と違つて、美しい蛇が兒の頭に纏き着き、二重に巻いて餘りを後方に垂れて、首と尾と繋いでゐた。農夫はこれを見て非常に驚き、

「これは必ずかの雷の授けた兒であらう」

かう心に思ひついたので、大切に育てゝゐるうちに、此の兒は目に見えて大きくなり、すでに十歳を過ぎる頃になると、一抱もある大岩を軽々と捧げ、

それを投げると十間も向ふに落ちる程、すぐれて力が強くなつた。そして歩くと大地がめり／＼と音して、其處が深く墮ち入る程であつた。

農夫は此の兒を元興寺の僧侶に頼んで擧問を教へてもらつた。しかるに此の元興寺の鐘樓に鬼が出て毎晩のやうに鐘撞きの者が取り殺された。

童子はこれを聞いて、僧に云ふには、

「私は此の鬼を殺して、鐘撞く者を御救ひ申しませう」と云つたので、僧は大いに喜んで、

「そんならおまへが往つて、あの鬼を打ち殺して呉れ」と云つて童子を鐘樓に出してやつた。

童子は其の夜、たゞ一人鐘樓に登つて鐘を撞いてゐた。すると見るから怖しい大きな鬼が出て来て、童子にかゝつて来た。童子は少しも怖れず鬼の頭を捉へて打ち殺さうとしたが、鬼の力も童子の力に劣らなかつたので、なか／＼打ち

殺すことは出来なかつた。鬼は童子を外に引き出さうとすると、童子は鬼を内に引き入れやうとする。かうして争つてゐる中に、夜は明けかゝつて来たので童子は鬼の逃げ去ることを思つて、急ぎ鬼の頭髪を握つて力をこめて引つ張ると、鬼の頭髪はこと／＼く抜け落ちた。鬼はそのまゝ何處ともなく逃げ去つてしまつた。

夜が全く明け放れると、多くの人々は鐘樓の下に集つて来て、童子に鬼の有様を問うた。童子は詳しく物語つて、人々と共に血の跡を尋ね求めて行くと、寺の後の墓に行つて跡が消えてゐた。こゝはもと此の寺に住んでゐた悪い奴僕を埋めたところであつた。此の奴僕は死んで鬼になつたのだと云ふことがわかつた。

此の時から鬼は鐘樓へ出て来ないやうになつた。そして其の鬼の頭髪は、後の世まで寺の倉にあつたと云ふことである。

三九、毘賣崎の鰐

出雲の國意宇郡の北の海に毘賣崎と云ふ處がある。昔天智天皇の御世に猪麿と云ふ者の女が、此の毘賣崎のほとりに遊んでゐると、突然海中から大きな鰐が現れ出て、其の女を海に引き入れてしまつた。

猪麿は女の叫び聲を聞いて、何事が起つたのかと、取る物も取あへず、馳け付けて行くと、海の上に女の死骸が浮いて、浪は血のために赤くなつてゐた。

猪麿は泣く泣く女の死骸を其處に葬つて、墓の傍を去らず嘆き悲んでゐた。かうして十日あまりも経つ中に、猪麿は如何かして女の仇を討ちたいと思つた。そしてある日、箭の鋭いのを選び、弓を持つて崎の上に立ち、天を拜み地に訴へて云ふには、

『天神地祇八百萬の大神等、また此の國に鎮座す三百九十九社の神々及び海の神の御前に申す。大神等の和魂は静りまして荒魂は皆悉く猪麿が請ひ願ふこ

とを聞かせ給へ、大神等まことに神靈あらば、何卒此の海の鰐を浮べさせて、女が仇を討たしめ給へ』と熱心に祈つた。

するとしばらくあつて海の上に凡そ百あまりの鰐共が、まんなか一疋の大きな鰐を取り繞んで、静かに岸の方へ寄つて来て、そのまゝ動かさずにゐた。

猪麿は大いに喜び、鉾を持つて其のまんなかの鰐を一突きに突き殺した。これを見てゐた多くの鰐は、何處ともなく去つて行つた。

猪麿は女の仇なる鰐を討ち取つたので、それを墓の前に捧げ、腹を割いて見ると、生々しい女の脛が出て来た。

其の鰐は串にさして路のほとりに立て、置いたと云ふことである。

四〇、鹿島の神と田村磨卿

桓武天皇の御代に、陸奥の蝦夷が蜂起して良民を亂し、掠奪を專にした。そして他の部落の蝦夷を集めて駿河の國まで押し寄せた。朝廷にはこれが追討の御相談があつたが、勅命は坂上田村麿に下つた。田村麿は身の丈五尺八寸、怒る時は猛獸も怖れ、笑う時は小兒も狎づくと言はれた程であつた。當時朝廷の武官の中で、最も英名の高かつた人である。天皇は親しく田村麿卿を召され、征夷大將軍に任せられ節刀を賜はつた。將軍は勇躍して京都を出發し途中の賊等を平けて東國さして進んだ。これを聞いた蝦夷共は田村麿の武名を怖れて、遠く津輕の奥に逃げて行つたので、將軍は宛も無人の境を行くが如く、蝦夷を追ひ討ちして津輕の奥深く這入つた。當時の蝦夷の酋長を一人は惡路王と云ひ、一人を惠美の高丸と云つた。何れも猛惡な獸の如き者で、神變不思議の魔力を持つてゐたので、さすがの將軍も容易く亡ぼすことは出来なかつた。

將軍は

「これは人力をもつては勝つことが出来ない、一に神明の援助を乞はなくてはならぬ」

かう思ひ付かれたので、一心に神々を念じた、中にも鹿島の神はわが國の武神であるから、將軍は平素から信仰してゐたのであるが、ある夜の夢に、

「わが力を以て、蝦夷をば必ず滅ぼさせるであらう」

と御告げがあつたので、將軍は非常に喜んで全軍の士氣は一層振うた。

しかるに蝦夷は將軍の威勢に怖れて、晝は山の奥深く隠れてなかく出て來なかつた。それで思慮深き將軍は、竹をもつて人の形を作り、それに紙を張つて彩色をし、笛や太鼓を打ち鳴らして蝦夷をおびき寄せ、かくして處々の蝦夷を討ち殺した。

ある日蝦夷の酋長、惠美の高丸は馬に跨つて攻めて來た。其の日は兩軍入れ

亂れて戦つたが、蝦夷の目には不思議なものが見えた。それは田村麿の軍勢の先頭に見馴れない一人の神のやうなものが居て、蝦夷の射出す矢を悉く一手に受けて投げ返へすので、蝦夷の兵はこの矢に當り、見る／＼中に死骸の山を築いた。これはさつと神であらう、かう云つて蝦夷は怖れた。

高丸は味方の敗軍を心もとなく思ひ、阿修羅の如く兩手に刀を振つて打ちかへつて來た。將軍は遙かに此の様を御覽なされてゐたが、手に持てる弓に矢を番へて放つと、過たず高丸が喉にぐざと立つた。さすがの高丸も馬上にゐたまらず、堂と落つるを將軍は駆け寄つて首を取つた。

會長を討たれたので蝦夷の軍は、ひとたまりもなく潰亂した。此の日の一戦で賊軍は全く鎮定してしまつた。

將軍は鹿島の神の加護に感泣して、其の御禮の爲めに神社を建てやうと思つた。そして士卒を率ゐて雁泊の沼のほとりを通ると、沼の底に一丈ばかりの鬼の首

が見えた。

將軍は馬を駐めて、

「汝は何者であるぞ」

と問うた、すると沼の底から嚴かなる聲が起つて、

「われは惠美の高丸が靈鬼である。汝に恨みを返へさんため茲に待つてゐたのだ」

と打つて掛からんとした。

將軍は少しも騒がず、腰なる劔を抜いて高丸が首を斬ると、沼の水は忽ち血の色になつた。そして惡鬼の影も消えてしまつた。

將軍は沼のほとりの深林に分け入り、三丈あまりの胡桃の大木の根に腰を掛けて、士卒と共に休息された。そして此の林の中に神社を建てやうと、持つてゐられた藤の鞭を、其の印に胡桃の木の傍に立てて置かれた。

すると其の藤の鞭に根が生へ、だん／＼延びて胡桃の大木に纏はりつき、花が咲いて、遠く望めば紫の雲のやうであつた。

此の林の近くに一つの村があつた。沼洲村と云つてゐたが、此の藤の花が咲いてから藤咲村と云うやうになつた。

將軍は胡桃の大木の根を取つて、鹿島の神の尊像を作り。これを津輕の守護神として遙に京都の方に向けて安置し、其處に立派な神社を作つて祀つた。これが今の藤崎村の鹿島神社である。

此の神社の境内は周圍數里に亘つてゐた。後、元和三年の夜、此の藤の蔓は一夜の中に、同じ林續きなる一つの村に延びた。それで當時の人は、これを神の藤と云つて、其の村を藤越村と呼ぶやうになつた。

四一、 大江山の酒顛童子

村上天皇の御時に、丹波の國大江山に鬼が住んでゐた。其の形は、晝は人であつて夜になると怖しい鬼の姿となつた。高さは一丈八尺、頭に角が生へて眼は鏡の如く輝き、口は耳もとまで裂けてゐた。そして全身に熊の如き長い毛があつて、手足の爪は鷲のやうに鋭かつた。此の鬼はまた多く酒を飲んだので、當時の人は酒顛童子と呼んでゐた。

此の酒顛童子はもと越後の國に生れたのであるが、性れつき力が強く心猛々しくて、常に喧嘩をして多くの人を殺したので、遂に國を逐はれて此の丹波の國に逃れ、大江山の奥深く住んで、時々里に出ては路行く人を捕り喰ひ、また種々の姿に化けて京都に現れ出で、若く美しい女を捕へ、それを妻にして仕つてゐた。そして女が年老つて來ると殺して肉を食ひ、また血を絞つて酒にして飲んだ。斯くの如く此の鬼の亂暴はやまなかつたが、當時誰も怖れてこれを退治するものはなかつた。それでいよ／＼勢強くなり、畏くも朝廷に仕へてゐた貴

き人々の女子をも取るやうになつたが、わけても池田中納言の女子はすぐれて麗はしかつたが、ある日ふと姿が見えなくなつた。父の中納言を始め、母親は非常に驚いている／＼と人を遣はして探せたが、姿は見えなかつた。此の姫の他に子供がなかつたので、ふだんから手鹽にかけて育てゝゐたのであるから、其の歎きも一層深く、如何にしても探し出さうとして、卜部の博士に占つて貰うと、

「此の姫は大江山の鬼に取られたのである。けれども今すぐに此の鬼を討てば姫は必ず救はれるであらう」と教へた。

父の中納言はこれ聞いて、急いで朝廷に出で、かくと天皇に奏聞したので、天皇は多くの官人を召して此の事を御相談になつた。其の時、關白がすゝんで申すには、

「此の鬼はすぐれて強く荒ぶる神であると聞いて居るから、容易く討ち取ることは難かしいでありませう。けれども今こゝに源の頼光と云ふものがあつて、世に勝れて強い武士であつて、其の使つてゐる者の中にも、貞光、季武、綱金時、保昌の五人があつて、此の者共をば鬼神も恐れてゐると聞いてゐます。鬼共は如何に強くとも天皇の治しめす此の國の中に、鬼の住むべき國はありませぬ。まして都に近き山に籠つて人を害ふいはれがありませぬ。それ故今此の者共を遣はして討たしめたなら、必ず討たれて滅びるでせう」と奏上したので、天皇は頼光を召して鬼退治の勅命を授け給うた。

源の頼光はまことに勝れて強い武士であつた。勅命をば謹んで受け奉り、其の使つてゐる五人の者共を召して相談せられた。

「私は今、天皇から大江山の鬼を退治するやう勅命を蒙つて參つた。けれども聞くところによればかの鬼共は、不思議な術を心得、また多くの鬼どもを従へ

て堅く城を守つてゐるそうである。なか／＼人力にては討つことは難からう  
 と思う。よつてこれから神の力を借り申さねばならぬ』  
 と云つて、頼光と保昌は八幡大神に、綱と金時は住吉の社に、貞光、季武の二  
 人は熊野の社に祈つて、何れも鬼退治の加護を請ひ奉ると、大神等は悉く  
 感應し給ひ、鬼を亡ぼす手段をも教へたので、其の教へのまに／＼、山伏の姿  
 になり劍を隠し持つて都を立ち出でた。  
 かくて丹波の國に到り、大江山の麓に着くと、柴を刈つてゐた翁があつた。頼光  
 は此の翁に

「千丈ヶ嶽は何處であるか。また鬼の岩窟へ行く道は何れであるか」  
 と問うと、翁は答へて

「此の峰のかなたに谷があります。谷のかなたにまた峰があり、其の峰のかな  
 たをば鬼の栖と稱へて、誰も行く人はありませぬ」

と云ふ。頼光等は其の峰を越えて行くと、岩高く谷深く草木は茂つて殆ど行く  
 べき道もない。唯心に神々を念じてたどり行くと、大いなる岩窟があつた。

『さてこそ鬼の岩窟』

と油断をせずに傍に行くと、中から髪も鬚も雪のやうに白い三人の老人が出て  
 來た。頼光は怪しく思つて、

「かゝる處に居給うは何れの人達でありまするか」

と問うと、其の人達は答へて、

「私等は決して怪しい者ではない。一人は攝津の國の者で、一人は山城、一人  
 はまた伊の音無里の者である。三人の妻や子を此の山のかなたに住む酒願童  
 子と云ふ鬼に取られたので、其の鬼を討たうと思つて來たのであるが、今あん  
 身達の姿を見るに、世の常の人と異り、必ず勅命を受けてかの鬼を討たんだめ  
 に來たものと分つたから、鬼のゐる處へ導かんと思ひ、此の岩窟に待つてゐ



たのである。先づ暫く此の岩窟に入つて疲勞を休めるがよい』  
と頼光始め五人の者を導いて岩窟の中に入れた。

老人等はまた酒頼童子を滅ぼさんさまを教へて云うには、

『かの鬼共は常に好んで酒を呑んでゐる。それで欺いて酒を呑ませて酔はせるがよい。けれども普通の酒では酔うてもまだ力があるであらうから、今私等が持つてゐる此の酒を飲ませれば、鬼共は變化の力を失つて、おん身達の心のまゝに殺されるだらう。またおん身達は此の酒を飲むと、平常よりも勝れて強くなる。これによつて此の酒を神便鬼毒酒と云うのである。また鬼の首を斬る時には此の兜を被るがよい』

と云つて、星兜に其の酒を添へて頼光に賜はつた。

それから老人等の導くまゝに、千丈ヶ嶽を登りつくすと、暗い穴があつた。其の穴をくゞつて出ると、水の清く流れてゐた川があつた。此の時三人の老人等

は頼光に、

『此の河をのぼつて行くと、十七八ばかりの姫が居る。其の姫に問うと必ずよく教へるであらう』

と云つて忽ち姿が消えて見えなくなつた。

頼光はこれによつてかの老人等は、八幡、住吉、熊野の社の神々であることを知り、あまりの忝けきさに其の跡を伏し拜んで御禮を申し上げた。

『かく神々たちは守つて居られる。酒頼童子は必ず討ち取ることが出来る』

と六人は勇みに勇んで、心の中に大神たちを祈りつゝ、教へられた通り川に沿うて上ると、十七八ばかりになる美しい姫が一人、河のほとりに出て、血の着いた衣服をば泣きながら洗つてゐた。

頼光は傍に寄つて、

『あなたは何處の人でありますか。また何故泣いてゐるのか』

と問ふと、其の姫は答へて、

「妾は京都の花園中納言の女子で、鬼に捕はれて使はれて居る身であります。妾の他にまだ十人ばかりの姫たちがありましたが、鬼共は妾等を妻にして後殺して食うのであります。堀河中納言の姫は今日血を搾られました。其の血のついてゐる着物を妾が洗つてゐるのです。池田中納言の姫は明日殺されるでせう。其の後に妾も亦殺されるのですが、都に居られる父母のことを思ひ出して、かうして泣いてゐるのでござります」

と云つた。頼光は聞いて、

「われ等は天皇の勅命を受けて鬼を征伐に來たものである。われ〜が來たからには決して心配するには及ばぬ。鬼の棲家の様子を詳しく教へられよ」と慰めた。姫はそれを聞いて始めて安心してらしく、

「此の河に沿うてまづすぐに上ると、鐵の城が高く聳えて門の外には多く

の鬼共が守つてゐます。門の内には玉のやうに美しい宮殿があり、其處をば酒顛童子が使つてゐる、星熊童子、熊童子、虎童子、金童子の四疋の鬼が守つて居ります」

と教へた。

頼光は姫の言葉のまに〜河に沿うて上ると、鐵門があつた。其の門を守つてゐた鬼共が六人の者を見て取り圍み、奥の方へ引き入れた。

すると生臭い風が吹いて來て雷電が鳴り、稻妻が光つて、酒顛童子は鐵の杖を持つて出て來た。そして童子は頼光を見て、

「此の山は世の常の山でない。峯高く谷深く、空飛ぶ鳥も野を走る獸も、未だ來たことはなかつたのに、汝らは如何にして此に來たのか」

と問うた。頼光は

「私等は出羽の國羽黒の山伏でありますが、久しく役の行者に仕へて鬼神の術

を習つてました。此の度伯耆の國の大山の天狗の許に行かうと思つて出て來たのでありますが、はからず道迷うて此處に來ました。しかるに今童子を拜むことが出來たのは何より喜ばしいこととあります。何卒ぞ一夜の宿を御貸し下さらば、共に酒を汲んで御心を慰ませう』

と云つた。童子は聞いて、  
『いやそれならば汝等は我等が仲間である。共に酒を汲まう。』  
と云つて、

『それ者共酒宴の用意をせよ』  
と命じた。召し使ひの鬼共は畏つて持ち出した酒を見ると、それは人の血であつた。召し使ひの鬼共は畏つて持ち出した酒を見ると、それは人の血であつた。剛氣の頼光は少しも驚かず、その血を飲んだ。また持ち出した肴を見ると、それは人の足を切つたものであつた。頼光はそれをも切り取つて喰べたので、童

子は疑ひの心が解けて、共に酒を汲み交はした。

そこで頼光はかの神々の授け給ひし神便鬼毒酒を持ち出して、酒頼童子に飲ませまた自分達も飲んだ。此の酒を飲んだ酒頼童子は非常に喜んで、

『われはかやうな貴い酒をまだ飲んだことはない。姫たちを呼び出して此の酒の酌をさせやう』

と云つて、都から捕つて來た姫たちを悉く呼び出して酌をさせた。また使つてゐる鬼共をも呼び出してかの酒を飲ませたので、鬼共は大いに喜んで起つて舞を舞うた。姫たちも舞ひ、それにつれて頼光を始め五人の者も共に舞うた。其の時綱は歌をうたつた。

『年をへし鬼の岩窟に春の來て

風さそひてや花を散らさん』

此の歌を繰り返しくしてうたつたが、酒頼童子を始め鬼共は悉く酔ふて心

が亂れてゐたので、此の歌を悟らず、

『いやこれは面白い歌ぢや』

と手を拍つて喜んでゐた。

かうしてゐる中に、さすがの酒頭童子も座にゐたまらぬ程酔つて來たので、姫だちを二人残して奥に入つて寢てしまつた。残つてゐた鬼共も一人づつ酔ひ倒れて、死人のやうになつて眠つてゐた。

頼光は時分はよしと、二人の姫たちに

『われ等は天皇の勅命を奉じて鬼を退治に來たものである。決して怖るゝことはないから、童子の寢たるところに案内をして呉れ』

と云つたので、姫たちは大いに喜んで、六人の者を導いた。廣い室を過ぎると石の橋があり、其の橋を渡ると童子の臥處があつた。そして鐵の扉が立つて、燈火が輝いて鐵の矛や杖を多く立て並べてゐた。其の臥處に童子は六人の者が

來たことも知らず、怖しい形になつて寢てゐた。

其の時の三柱の神が現れ、鐵の扉を開けて六人の者を呼び入れ、

『鬼の手足をばわれ等は鎖をもつて、柱毎に繋いで置いたから動くことは出來まい。頼光は先づ首を斬れ、五人の者は身を寸断せよ』

と仰せられてまた消えてしまつた。

頼光は大いに喜び、劍を取つて酒頭童子が首に斬りつけると、忽ち眼を見開いて起き上らうとしたが、手足は神々のために鎖に繋がれてゐるので起きることが出來ず、聲を上げて叫び狂うたので電雷のやうに響きさしも堅固な城は地震のやうに搖れた。

やがて頼光は首を斬つた。すると其の首は忽ち飛び上つて、頼光を目掛けて喰ひつかんとしたが、頼光が被つてゐた星兜を恐れて傍に寄れなかつた。其の間に五人の者どもは童子の身をずた／＼に斬つたので、酒頭童子はとう／＼殺さ

れてしまつた。

此の物音を聞いて集つて来た鬼共を何れも殺したが、茨木童子と名乗る鬼は勝

れて強い鬼であつたが、これと戦つた綱は此の鬼に押し伏せられてしまつた。危く見えたと

ころを頼光は走り寄つて、茨木童子が首を斬つたので綱はやうく助かつた。

頼光を始め五人の者は、逃ぐる鬼どもを追ひ討ちして悉く殺した。血は流れて鬼の岩窟に漂うた。

四一、 渡邊綱

攝津守源頼光の臣下に四天王と云つて、すぐれて強い武士が四人あつた。其の

中で渡邊綱は武勇殊にすぐれてあつた。綱は武藏の國の美田と云ふ所に生れたので、美田源次と云つて居る。

綱はある時、京都の一條大宮と云ふところに、頼光の使者となつて、鬚切と云ふ源氏重代の大刀を佩び、馬に乗つて行つた。

歸る頃になるともう夜は更けて、道を通る人もない。此の頃京都の街に鬼が出てると云ふ噂があるので、家々の戸は堅く閉ざされて、街の中は静まりかへつて居る。

剛氣の綱は少しも寂しいと思はず、馬に乗つて悠々と一條堀川の戻橋を渡つて

来ると、東の橋づめに、年の頃二十あまりの、肌は雪の如く清く姿のやさしい

女が、紅梅の打着に守袋を胸にかけ、手に經をもつて供をも連れず、たゞ一人南の方へ歩いて行く。綱は橋の西のつめを過ぎるを、彼の女は後より呼び留めて、

「あなたは何處へ御出でなされますか。妾は五條へ參るもので御座いまするが、夜が更けて怖しくてなりませぬ。何卒を御送り下されませぬか」となれしく云ふ。綱は急き馬より飛び下りて、

「御容易いことで御座います。さ、御馬に御召し下さる」と云つた。女は嬉れしげに、

「有り難う存じまする」

と云ふ。綱は女を抱いて馬に乗せ、堀川の東のつめを南の方へ行つて、正親町へ近くなつたところで、女は後をふり向いて、

「まことは五條のほとりには、さしたる用事もないので御座います。妾の家は都の外で御座いまするが、そこまで御送り下されませぬか」

と云ふので、綱は

「何處までも御送り申しませう」

と云ふ。女はそれを聞いて忽ちに恐しい鬼となり、

「いざわが行く處は愛宕山であるぞ」

と云ふまゝ、綱が髻をつかんで引きさげ、空高く飛び上つた。

綱は此の時少しも騒がず、腰なる鬚切をさつと抜き放ち、髻をつかみし鬼が手をふつと切つた。綱は北野の社の廻廊の屋根の上にとりと落ち、鬼は手を切られ、愛宕山の方へ光りながら逃げた。

さて綱は廻廊から下りて、髻に附いてゐた鬼の手を取つて見ると、銀の針を立てたる如き白き毛が隙間なく生ひ、鐵の如く黒い腕であつた。

綱は此の腕を持ち歸り、頼光にかくと申し上げると、頼光は大いに驚いて、

「これは不思議のことである。急ぎ清明を呼んで參れ」

と、播磨守安部清明と云ふ名高い卜者を呼んで、

「さてこれから如何致したらよいか」

と問ふと、

「綱は七日の暇を給はつて謹み、仁王經を讀みなされ。また鬼の手をば能くよ  
く封じて置き給はれ」

と教へたので、綱はその通りに行ひすましてゐた。

すでに六日も過ぎた日の夕暮れ方、綱が家の門をほとくと叩くものがあつた。

「これは渡部のほとりの乳母で御座いまするが、どうぞ御取り次ぎ下されませ」と云ふ。

綱は取り次ぎの者に申させては、悪からうと思ひ、門のところまで立ち出で、

「はるくの御上りでは御座いますが、七日の物忌をして、今日は六日になりました。それで明日一日は如何なることがありましても、御逢ひすることは出来ませぬ。どうぞ御宿をもとめて、明後日御出で下され」と云つた。これを聞いた乳母はさめくと泣いて、

「それではとても力及ばぬことで御座います。けれどもおん身がまだ幼い時から、妾の手一つで養ひ育てた苦勞は、まあどんなだと思ひまするか。夜とても安心して寝たことはなく、濡れたるところには妾が寝ね、乾いたところにおん身を置いて、四つや五つになるまでは、荒い風にも當てまいと苦心し、何時かおん身が成長して天晴れなる男になることのみを樂みとして、夜も晝もそればかり願つてゐた甲斐あつて、今では攝津守殿の御内には、美田源次と云へば肩を双ぶる者もなく、上にも下にも賞められてゐるを聞いて、此の乳母はそれが嬉しくしてなりませぬ。かうして遠く離れてゐては、常におん身を見ることが出来ぬのが、心残りで、それに此の頃打ち續いて夢見が悪いので、おん身のことが氣にかゝり、はるくと渡部から尋ねて來たものを、門の内へも入れられず、親とも思はれぬ妾はなんと、云ふ情ないことだらう」と口説いた。綱は道理に責められて、致し方なく門を開け家に入れた。

乳母はいそ／＼と悦んで、いろ／＼な過ぎたことや、行末の物語りなどして、  
 「さて七日の物忌みとは何事で御座いまするか」  
 と問ふ、綱は隠してもせんないこと、思つたので、有りのまゝ詳しく語ると、  
 乳母はこれ聞いて、

「それほどの事とも知らず、女氣の心せまく、おん身を恨んだのは悪いことで  
 ありました。しかし親は守りとも云ふことがあるから、物忌みにさわるやうな  
 ことはありますまい。そしてまた鬼の腕と云ふものは、如何いふ物か見せては  
 呉れませぬか喃」  
 と云ふ。綱は答へて、

「それは容易いことではありまするが、堅く封じてあるので、七日過ぎなければ  
 御目にかけれませぬ、明日暮れれば早速御目にかけてませう」  
 と云つた。乳母は聞いて、

「よし／＼、それならば見なくとも事が關くことではない。妾はまた此の夜  
 明けに、渡部に歸らなければならぬ」  
 と恨むやうに云ふので、綱は致し方なく封じて置いた鬼の腕を、奥から取り出  
 して乳母の前に置いた。  
 乳母はこれを手につけて、打ち返へし打ち返へし見て  
 「さても恐いもの、鬼の腕とはかういふものであるか」  
 と下へ置くやうにして、其のまゝ立ち上り、  
 「これはわが腕なれば取つて行くぞ」  
 と云ひつゝ、忽ち恐い鬼になつて飛び上り、破風の下を蹴破つて、空に光り  
 つゝ見えなくなつてしまつた。  
 綱は鬼に腕を取り返へされて、七日の物忌みが破れたが、仁王經の力によつて  
 何事もなかつた。



これから後、渡邊家の人々は、家を造るに破風を立てず、東屋造にすると云ふことである。

四三、蜘蛛の怪

渡選綱が鬼の腕を切つた年の夏、源頼光は瘡病にかゝり、醫師や加持祈禱といろく手段をつくしたが更に其の験が見えなかつた。そして病が強くなる時には、頭が痛み體が火のやうに熱くなり、上にも着かず下にもつかず、體が中に浮かれて惱むのであつた。

かやうに苦んで三十日あまりも経つたが、病が少しも好くならなかつた。ある時、また病が強くなつて、さしも剛勇な頼光も悶え苦しんでゐたが、やうく鎮つたので看護してゐた四天王の者共も、別の室に退いて休んでゐた。すると、かすかに燭つてゐた燈火のかけから、七尺ばかりなる一人の法師が、

するくと歩み寄つて、繩をとりさばいて頼光を縛らうとした。うつらうつらと眠つてゐた頼光は、これに驚いて、がはとはね起き、  
 「何者なれば、頼光に繩かけんとするか、無禮な奴め」  
 と枕元に立て、置いたる太刀をおつ取り、法師を目がけてはつたと切つた。此の物音を聞きつけて四天王の者共、  
 「わが君、何事で御座いまするか」  
 と問ふ、頼光は此の事を話して、  
 「たしかに手ごたへがあつたが、そこらを探して見られよ」  
 と云ふ。四天王は見るとあたりに血がこぼれてゐた。手に手に灯を炬して血の痕を尋ねて行くと、都の外の北野の後に大いなる塚がある。其の塚の中に入つてゐる。

四天王は其の塚を掘り返へして見ると、四尺許なる山蜘蛛であつた。

頼光はこれを見て、

「こればかりのものに誑されて、三十日あまりも惱されたのは不思議なことである」

と云つて鐵の串にさし河原に立て、曝して置いた。

此の蜘蛛を切つた太刀を膝丸と云ひ、渡邊綱が鬼を切つた太刀を鬚切と云ひ、其のわけは頼光の親の満仲と云ふ人が、天下を鎮むるには名劔がなければならぬと思ひ、よく鍛へてこしらへさせた太刀が二振あつた。それをもつて試斬をして見ると、一つは鬚まで切れ、一つは膝もろとも切つたので、鬚切、膝丸と名づけて源氏の寶物として頼光に傳へたのである、  
頼光の時に、鬼を切つた鬚切を鬼丸と改め、膝丸をば蜘蛛丸と云つて、末長く傳へるやうになつた。

#### 四四。頼政鵄を射る

高倉天皇の御時、御殿の上の空に鵄と云ふ鳥が鳴いた。此の鳥が鳴けば凶事があると云ふので、朝廷では御協議になつたが、ある人は

「これは源頼政に射させられたらよからうと思ひまする」

と云つたので、頼政を召して射させられることゝなつた。

頼政は聞えたる弓の名人であつたが、

「畏まりました」

と勅命に答へて退出した。そしてつくづく思ふやう、

「晝の中でも小さき鳥であれば射難いものを、まして五月闇の空に雨さへ降れる今宵である。ああわが弓箭の冥加がつかせてしまつた」

と嘆いた。そして心に八幡大神を念じ、鵄の鳴く聲を目あてに切つて放した矢は、あやまたず中つて、鵄は御殿の屋根から轉げ落ちた。

天皇を始め殿上の公卿どもは、この様を見て皆頼政の武藝を賞め贊へた。

後徳大寺の中納言は

「郭公名をも雲井にあぐるかな」

と上の句を詠むと、頼政はとりあへず、

「弓張月のいるにまかせて」

と下の句をつけた。

頼政は此の時、墓目の外に征矢をも持つてゐた。後にある人が此の事を問ふと、  
「もし鷄を射損へば私に射させよとすゝめた人を射んが爲めである」と答へたと云ふことである。

四五、鈴鹿山の鬼神

崇徳天皇の御時、近江の國の鈴鹿山に立烏帽子と云ふ者があつた。伊勢の大  
宮に參拜する往來の人々の路に塞つて、あるひは命を取つたり、物を奪つたり

してゐたので、其の山のあたりを通るものがなくなつた。

此の立烏帽子と云ふ鬼は形は女であつて、非常に美しかつたので、是れ迄多くの  
の武士が討手に向つたが、其の美しい容姿に迷つて、なか／＼討ち取ることが  
出来なかつたのである。天皇は御心をなやませられ、坂上朝臣田村利成と云ふ  
者に、かの女鬼神を打ち取れと命じ給うた。

田村は勅命を奉じて急ぎ鈴鹿山に登り、立烏帽子の棲家を尋ねて歩いたが、ど  
うしても探し當てる事が出来ず、はては路に迷つてしまつた。それで致し方  
なく山の中をあちらこちらと歩いてゐる中に、一つの大きな沼のほとりに出た。  
沼の中に三つの島があつて、其の島毎に橋をかけ立派な家を造つてあつた。田  
村は心に此の島の中の家が、必ずかの立烏帽子の棲むところだらうと思つたが、  
船がないので渡ることが出来ず、其のまゝ多くの年を暮した。

ある時田村は墓目に矢をつくりつけて、其の中に文を書いて島の中に射てやる

と、島からまた其の矢を射返へして來た。これによつて此の立烏帽子は、陸奥の國の惡路王と云ふ、惡鬼の妻であることが知れた。

立烏帽子は此の惡路王をいとしいとは思つてゐなかつた。それである時文を書いて小さい烏に持たせて、田村の居る前に落とさせた、田村は怪しく思つて其の文を取つて見ると、

「妾は此の世を守る女神であるけれども、妾が夫の惡路王に従つてゐるので、自然と悪い神になつて、天皇の詔に従ふことが出来ないのである。もし妾の云ふことを聞いて、かの惡路王を殺して呉れるならば、妾は決して天皇の詔に負くやうなことはしない。また喜んであなたの妻になりませう。それであるから惡路王が此の島に來た時に、何卒を討ち殺して貰ひたい」と書いてあつた。

田村はこれを見て非常に喜び、夜晝惡路王の來るのを待つてゐた。

此の立烏帽子が持つて居る寶物の中に、如意珠と云ふ眞い珠があつた。此の珠に思つてゐることを云ひつけて投げやれば、思ふ處に飛んで行つて、其の云ひつけたる通り云ふことが出来る珠である。

立烏帽子はかの惡路王が來る日が分つたから、此の珠に云ひつけて田村の方に投げてやつた。田村は珠を取つて聞くと、

「明日の曉に惡路王は此の島の上に立つて、沼の景色を眺めることになつて居ります。何卒を能くねらつて射殺して下さい」

と云つた。其の聲は小さい虫の鳴くやうであつたが、田村は喜んで此の珠を三度拜んだ。次の日の夜明け方に、田村は早く起き出で、沼のほとりに行つて見ると、聞きしに違はず島の上に惡路王が立つてゐた。

其の形は見るも恐しい鬼であつた。そして頭が八つあつて、多くの眼は鏡のやうに光つてゐた。其の體から五色の光りを放つて、立烏帽子の手を取り、後に

は多くの美しい少女を従へて、悠々と島の上を歩いてゐた。  
 田村は角の弓に矢を番へ、心に天照大神宮を祈つて、切つて放した其の矢は  
 悪路王が胸の下をあやまたず貫いた。さすがの悪路王も堂とばかりに倒れて、  
 そのまゝ死んでしまつた、これを見た立烏帽子は大いに喜び、沼を飛び越えて  
 田村を抱いて島に還り、家に請じ入れて夫婦となつた。  
 其の時から立烏帽子はよく朝命を守つたので、鈴鹿山の道ももとの如く何事も  
 なく通れるやうになつた。

四六、夢野の鹿

攝津の國の夢野と云ふ野に、むかし一疋の牝鹿が住んでゐた。此の牝鹿は刀我  
 野に住んでゐる、牡鹿と夫婦になつてゐたが、牡鹿は淡路の國の牝鹿の許にの  
 み通うて行つて、夢野に来ることが少なかつた。それで夢野の牝鹿は常に此の

ことを嘆いて、牡鹿を恨んでゐた。ある夜牡鹿は珍しく夢野に尋ねて來た。牝  
 鹿は久しい間のつもる物語りをしてゐる中に、夜はほのくくと明けて、東の空  
 は白んで來たので、牡鹿は歸る支度をしてゐた。  
 其の時牡鹿はふと思ひ出したやうに、牝鹿に向つて云ふには、  
 『過ぐる夜の夢に、私の背中に雪が降り積つて、それから都須々紀と云ふ草が  
 生ひ茂つた夢を見たが、これは吉いことであらうか。また凶い兆であらうか』  
 と問ふた。  
 牝鹿はこれ聞いて、牡鹿がまた淡路島の牝鹿のもとへ行かうとしてゐること  
 を恨めしく思ひ、  
 『背中に草が生へたと夢見たのは、矢が背中を射る祥であります。また雪の降  
 つたのは、白い鹽をあなたの肉に塗られる祥で、あなたのためには非常に悪い  
 夢で御座います』

と詐り、

「あなたはこれから、淡路島に御渡りなされば、途中で必ず船人に逢ふでせう。そしてすぐに海に射落されるでせう」と教へた。

けれども牡鹿は淡路島の牝鹿が悲しくてたまらなかつたので、牝鹿の云ふことも聴かず、海を泳いで淡路島に渡つたが、途中船に行き遇つてとうとう射殺されてしまつた。それで此の野を夢野と云ふのである。

### 四七、足柄明神

相摸の國足柄山に鎮り座す神は、御夫婦二柱の神である。

ひかし、男神は此の國を去つて、はるくと唐の國へお渡りになつた。そして女神はたゞ一人相摸の國に留つてゐられたが、それから三年過ぎて、男神はな

つかしい相摸の國へ御還りになり、久々にて女神と御逢ひなされた。其の時女神は色が透きとほるやうに白く、ふくらかに肉ついて、大層美しくなつてゐた。これを男神は御覧になつて、御心おもしろからず、

「私はながい間他國へ行つて、おん身はたゞ一人此の國へ留つてゐたのだからさだめし私のことを思ひ煩つて、夜晝なげき悲しみ、體も瘦せ衰へてゐることだらうと思つてゐたが、今おん身を見るに、もとにまさつて肥つて美しくなつてゐる。これは少しも私のことを思つて呉れないからである。私は向ふの國にゐる三年と云ふものは、毎日／＼おん身のことを思つてなつかしくしてたまらず早く歸りたい／＼とばかり考へてゐたのだ」

と云つて、女神を恨んだ。そしてとうとう女神をば離縁をしてしまつたと云ふ。

### 四八、姫嶽の明神

日向の國鹽田と云ふところに、華本と呼ぶ女を持つてゐた一人の富豪があつた。此の少女は世にすぐれて美しくあつたので、多くの男共は、ひたすら少女を得やうと思つて、いろ／＼と手段をつくしたが、少女の父親はなかくさかず、

『私の女は普通の男にはやれなう』

と云つて、後の庭に家を造り、こゝに少女を入れ置いて、人に見せず秘密にして養育してゐた。

かやうに深く隠してゐたのに、如何して来たものか、ある夜一人の男が少女の室に忍んで来た。年の比二十歳ばかりでもあらうか、世の常の男と思はれぬ程崇高い姿をしてゐたので、少女はとう／＼此の男に遇つてしまつた。そして男は毎夜のやうに忍んで来た。

けれども男は晝は来ることがなかつた。夜が更けてから、あたりを忍んで静かに訪れて来るが、やがて曉近くなり、戸の隙間から日が射しこむやうになる

とあはて、歸つて行くのであつた。

かうしてゐる中に、少女に仕へてゐる侍女は、男が忍んで来ることを悟つて、少女の父母に告げたので、父母は大いに驚き、少女を厳しく責むると、隠すことが出来ず、少女はありのまゝを話してしまつた。

母親は聞いて、

『それならば、今夜にも其の男が来たら、夜明けに歸る時、針をもつて苧環を貫き、知れないやうに男の襟に刺して置きなさい』  
と教へた。

其の夜の更けゆく頃、男は静かに忍んで来た。そして一夜少女と語り明かして曉近くなる頃、名残り惜しげに立ち去るところを、少女は母に教へられたとほり、針を取つて男の襟にさしてやつた。

夜が明けてから此のことを父母に告げた。父母は少女と共に此の糸を尋ねて行

くと、日向の國と豊後の國との界なる、嶺嶽の大きな岩窟に入つて止つてゐた。

其の時、窟の奥の方で苦しうに唸る聲が聞えた。人々はこの聲を聞いて非常に怖れて、遠く離れてゐた。

少女と父母とは窟の前に立つて、

「かうして哭いてゐるゝは何處の神でありまするか。また何故にお哭きなされてゐるのですか」

と問ふと、其の聲は答へて、

「われは華本の夫である。またわれの哭いてゐるわけは、此の曉の針は、わが腮に中つて痛みが堪へがたく、今死なうとしてゐる。これによつて苦しき哭くのである」

と云ふ。少女は聞いて、

「どうぞ御姿を見せて下さりませ」

と云ふと、驚くばかりに大きな蛇が、のろくと窟の中から這つて、その頭をさし出した。其のからだの長さはどれ位あるかわからない程であつた。

少女を初め人々は此の大蛇を見て大いに驚き、ことごとく逃げて歸つた。其の大蛇はとうとう窟の中で死んでしまつた。

少女は此の時妊娠になつてゐた。そして男の子を生んだが、其の子は剛勇無比非常に早く走つた。そして其の足に胼胝があつたので、所の人には輝大童と呼んでゐた。其の五世の子孫に伊能と云ふ男があつた。體に蛇の尾の迹があつたので、尾形三郎伊能と云つてゐた。此の伊能は壽永の戦亂に、平氏と戦つた武士である。

針に刺されて死んだ大蛇は、嶺嶽明神であると云ふことである。



四九、餅白鳥と化る

昔豊後の國球珠郡に茫茫とした野原があつた。あたりに住む人もなかつたので、丈なす草は一面に生へて、晝の間も虫が鳴いてゐた。其の頃同じ國の大分郡に某と云ふ人があつたが、家族を引き連れて此の野に移つて来て、田を作り畑を耕しなどしてゐた。日も夜も怠らず働いたので、今は家も富み榮え、たのしい日を送るやうになつた。

ある時家の人達が集つて酒を飲んで遊んでゐたが、某の男は弓を射て慰まうと思つた。しかし武士の家ではないので、格好なものがなかつた。それで餅を藁にくくりつけて樹の枝に下げ、それを的にして弓を射て居ると、餅は忽ち白鳥に化つて、何處ともなく飛び去つてしまつた。

それから後、此の男の家はだん／＼に貧しくなつて、一家は行衛が知れなくな

つてしまつた。  
それから長い間、野原にはまた草ばかり生へてゐた。  
天平年中、速見郡に訓邇と云ふ人があつた。ある時、此の廣野を見て、かほどの野原をたゞ荒れるにまかして置くのは惜しいものだ、と思つたらうか、人々を語らつてこゝに移り住み、田を作りはじめたが、其の苗はみんな枯れてしまつて、一寸も生長なかつた。それで人々は、これは何か祟りがあるのだらうと恐れ驚いて、田を作ることをあきらめた。それから其の野原には、また草ばかり生へるやうになつた。

五〇、雉子噺

ひかし攝津の國長柄川に橋をかけた時に、幾度造つてもかけることが出来なかつた。それで、これは必ず河の神の御心であらうと、占はせると果して河の神

の御心であつた。

「人柱を一人河の底に埋めて、河の神を祀れば橋をかけることが出来る」  
かう占に出た。

「如何なる人を」

と問ふと、

「つぎしたる袴を着たる人を献げよ」

と御教へになつた。それで其のところになんか新しく關所を設けて、つぎしたる袴を着たる男が通れば、捕へて人柱にしやうと待つてゐた。岩氏長者と云ふ者があつた。此の事を知らず、つぎした袴を着て、此の關所を通ると、關の役人どもは無理に長者を捕へ、遂に人柱にして水底に沈め、それで河の神を祀つたので其の橋はやう／＼出来上つた。

此の岩氏に女が一人あつた。すぐれて麗しくて、紅粉を施ひなくても色が美

しく、朝日に輝くばかりであつたので、世の人は照日の前と呼んでゐた。しかるに此の少女は大きくなつても物を言はなかつた。それで母親はたいそう嘆いて、外へ出さず深く隠してゐた。

河内の國の禁野と云ふ里に一人の男があつた。此の少女を嫁にもらひ受けて、垂水の母親の家から迎へとつて妻としてゐた。此の少女は妻となつてからも、ながい間物を言はないので、男は怪しく思ひ、少女をば母のところへ送り返さうとして、途中雉子燈と云ふところを通ると、一羽の雉子は聲高く啼いてゐた。男はよくねらひすまして此の雉子を射殺した。此の様子を見て居た少女は忽ち物を言つて歌を詠んだ。

「物言はじ父は長柄の橋柱」

鳴かずば雉も射られざらまし」

此の歌を幾度も／＼繰り返へして歌つた。男はこれを聞いて大いに驚き、母の

もとへ行かず、そのまゝ少女を連れて禁野に引き返し、悦んで棲むやうになつた。

それで此のところを雉子堰と云ふのである。

五一、 役の行者小角

和泉の國に小角と云ふ者があつた。賀茂の役君の後裔であるが、三十二歳の時家を出て葛城山に入り、巖窟の中に棲んで仙術を修業し、三十年の後には自由に其の術を行うことが出来た。そして常に藤葛を身に纏うて衣服となし、松の果を喫ひ神術をもつて五色の雲を起し、それに乗つて遊んでゐた。小角の部下には多くの鬼神があつた。それで當時の人は小角を役の行者と呼んでゐた。葛城山と金峯山との間に深い谿があつた。路は峻険しくて行く者は皆苦しんだ。小角はある時山の神を悉く召し集めて、

「此の二つの山の間の谿は峻険しいので、往來の人は皆苦しんでゐる。それで私は今橋を作つて往來の人々の難儀を救はうと思ふ。あなた方は私の云ふことを聞き下さらば、葛城山から金峯山にかけて一つの石橋を御造り下さい」と云つたので、多くの神々は一生懸命に石を運んで橋を作つたが、なか／＼出来上らなかつた。

小角はこれを見て怒り、神々を罵つて云ふには、

「早く橋を作るやうに云つたのに、何故また作りあげないのか」と怒つた。神々は答へて、

「葛城の峰の一言主神は容貌が醜いので、晝は恥かしかつて來ず、夜のみ出て石を運んでゐます。それで晝は橋を作ることが出来ず、夜のみ作つてゐるのでまだ出来あがないのです」と云つた

小角は一言主神を呼んで、

『今日から晝も出て石を運び、早く橋を作りあげなければいけない』

と云つたけれども、一言主神はなかく聞かなかつた。それで小角は非常に怒つて、神術を以つて一言主神を捕へ、深い谷の底に繋いでしまつた。一言主神は小角を恨み、朝廷のある官人に、託つて告げるやう、

『役の行者の小角は謀叛を企て、居ります。私は彼のなす様を見て居るに、天皇の國を傾けやうとして居ます。早く滅ぼしてしまはないと、必ず大事になりますでせう』

と誨へたので、朝廷にては小角を捕ふることになつた。

けれども小角は神術をもつて空を自由に翔けて逃げるので、如何しても捕へることは出来なかつた。それで小角の母親を捕へて來たので、孝心深い小角は、致し方なく自らすゝんで朝廷に出た。

天皇は小角を伊豆の大島に流し給うた。小角は此の島に三年の間ゐたが、晝の中は島の中に居るけれども、夜になると必ず富士山に登つて行つた。其の途中の海を渡る時などは、浪の上を走るとは平地を行くよりも早かつた。そして夜明け方には、飛ぶ鳥よりも早く空を翔けて來て、またもとの大島に歸つてゐた。後赦されて歸つたけれども、間もなく空に昇つて飛び去つた。其の後小角は海の上に草を泛べ、自ら其の上に乗る、また母を鉢に載せて、何處ともなく立ち去つてしまつた。攝津の國箕面山に瀧がある。昔小角はこの山に來て、瀧の口から龍宮に行つたと云ふことである。

五二、久米仙人

昔大和の國に久米仙人と呼ばれてゐた男があつた。仙術を得て自由に空を翔け

まわつてゐたが、ある時吉野川の上の空を飛んでゐると、其の河に一人の少女が衣服の裾を高くかゝげて洗濯をしてゐた。久米仙人はこの少女の白い脛を空の上から見て、忽ち心が迷ひ其處に落ちてしまつた。そして少女と夫婦となつて其の村に住んでゐたので、後そこを久米邑と呼ぶやうになつた。

久米仙人は少女を妻として此の國の人となつてしまつたので、空を飛ぶ術も忘れ神通力も失せてしまつたけれども、まだ世の人々にすぐれて賢い行があつた。

其の時の天皇は大和の國高市と云ふところに、宮殿を造營せ給うた時、其の國の人を多く召して、宮殿を造るべき木を運ばしめられた。其の人夫の中に久米仙人も交つてゐた。

ある時官人は久米仙人に戯れて、

「おまへはもと仙人だつたそうだが、今でも此の木を祈つて飛ばすことが出来

るか」

と云つた。久米は聞いて

「まあ出来るか如何か試して見ませう」

と云つて、獨り家に閉じ籠り、一心不亂に祈り。かくして七日七夜の間家を一步も出ずに祈つてゐたが、八日の朝になると、今まで晴れてゐた空は俄に曇り風強く吹いて、南の山にあつた木は悉く飛んで、宮殿を造るところに落ちた。

これから後里人は、久米仙人を畏れ敬ふやうになつたと云ふ。

五三、 晡時臥山の蛇

常陸の國茨城の里に、晡時臥山と云ふ山がある。

昔此の山の麓に、兄と妹と二人の者が棲んでゐた。兄の名を努賀彦と云ひ、妹

の名を努賀姫と云つてゐた。然るに此の頃努賀姫の室に誰とも知らぬ男が、毎夜忍んで来た。此の男は夜ばかり来て、晝は少しも姿を見せなかつた。何處の者だか教へもしなかつた。そして姫と夫婦になつて棲んで居るうちに、姫は妊娠になつて、月満ちて生んだのは、一疋の小さい蛇であつた。此の蛇は晝は物を言はなかつたが、夜になると母の努賀姫と語る状は、少しも人と異ならなかつた。此の様を見て兄妹は大いに驚き、

「これはたゞの人の子ではあるまい。必ず神の子であらう」

と思つたので、淨い杯に入れ、壇をこしらへて其の上に置くと、たつた一晩の中に杯にあふれるやうに大きくなつた。更に杯を代へて入れると、また翌日になるといつばいになつてゐる。かうして三度も四度も容器を代へてゐたが最早や容れるやうなものではなくなつた。そこで其の母親は蛇に告げて云ふには、

「汝の器量を見るとたゞの世の人の子でないやうに思はれる。必ず神の子であらう。けれども今の妾等の力では、汝を養ひ育てることは出来なくなつた。疾く汝の父の居るところへ行きなさい」

蛇は母の言葉を聞いてゐたが、涙を流して泣き悲み、

「母上の仰せを背くのではありませぬが、私一人で行くのは心もとないやうに思はれます。何卒誰か一人私に副へて下さりませぬか」と御願ひした。母は聞いて、

「妾の家には汝の母と伯父とよりないことは、汝もようつく知つて居るではないか。それを知つてゐながら云ふのは無理なことである。汝はたゞ一人で、早く立ち去るやうにきなさい」

と云つた。蛇はこれを聞いて少し怒つたやうな様子で、しばらく物も言はなかつたが、やがて立ち去る時に、怒にまかせて伯父の努賀彦を震ひ殺さうとして

天に昇つて行つた。母は大いに驚き、傍にあつた瓮を取つて投げ付けると、蛇は天に昇ることが出来ず、此の晡時臥の山に留つた。それで努賀彦等が子孫は、其處に社を立て、此の蛇を祀つたと云ふことである。

五四、處女塚

昔攝津の國に一人の少女があつた。容貌は世に勝れて美しくあつたので、思ひのたけをかきくどいて云ひ寄る男が多かつたが、其の中で身も世もあらぬ程慕うてゐた若い男が二人あつた。一人は少女と同じ國の者で菟原と云つた。一人は和泉の國の者で血沼と呼んでゐた。

然るに此の二人の男達は、年頃も顔貌も、物の言ふさままで、たゞおなじやうに似てゐた。また其の氣心も何れも優り劣りのない程勝れてゐたので、少女は

二人を憎からず思つてゐたものの、さて何れの男に遇つたらいか、思案に暮れてゐた。

かくて何れとも定めかねてゐる中に、月日は流るゝ如く過ぎ去つて、少女はやう／＼年老けて來た。その間も二人の男は毎日のやうに少女の家を訪ねて、堪へ難い思ひを訴へるのであつた。

少女の親は見るに見かねて思案を定め、ある日二人の男を呼んで、

「あなた方の御志の程は、私もまた娘もようつく分つてゐます。けれども二人ともあまりに優り劣りがないものですから、娘は何のお方にきめていか迷つてゐるので御座りますが、今日こそは此のことをさつぱりとお定め申しませう。それはあの野を流れてゐる生田川に、一羽の美しい水鳥が浮いてゐますから、あれを射あてた方に、娘を差し上げることに致しませう」と云つた。

男達はこれを聞いて非常に喜んだ。今日こそは戀ひ慕う少女に遇うことが出来る、二人は川岸に並んで心に神様を祈りながら、弓に矢を番へて狙を定め

た。少女は窓の中から胸を躍らせて眺めてゐた。やがて弦音高く響いたかと思ふと、あゝ、一羽の水鳥に二本の矢が立つてゐた。一人は頭を、一人は尾を射たのであつた。

少女は聲を立て、泣いた。そして歌を残して生田川に身を投げて死んでしまつた。

『住みわびぬわが身なげてん津の國の』

生田の川は名のみなりけり』

二人の男は少女の死んだのを見て、どんなに悲しく思つたらう。つゞいて同じところに落ちて死んだ。やがて近所の人達が駆け寄つて三人の死骸を引き揚げ

ると、一人は少女の足を一人は少女の手を堅く握つて、やすらかに死んでゐた。

男達の親が来て、此の少女の塚の傍に葬つてやりたいと思つた。そして攝津の國の男の親は、

『あなたの息子は他の國の人だから、此の國の土へ葬ることは出来ませぬ』と斷つたので、和泉の國の男の親は、わざわざ自分の國から土を運んで来て、息子を葬つてやつた。

少女の塚を中に置いて、右と左に戀に殉へた若い男の塚がある。

處の人は此の塚を處女塚と呼んでゐる。

### 五五、丹後の天女

丹後國丹波郡比治の里に山がある。此の山の頂に真井と云ふ井戸があるが、



此の井戸は後沼になつた。

昔天女が八人空から降つて来て、此の井戸の中で水を浴びて遊んでゐた。しかるに此の里の和奈佐老翁と、和奈佐老媪と云ふ二人の者は、ひそかに往つて、其の天女の羽衣を取つて隠してしまつた。

人の来るのに驚いた天女達は、各自分の羽衣を着て空高く飛び去つたが、後に残つた一人の天女は、羽衣がないので飛び去ることが出来ず、悲しげにそこに立つてゐた。

老翁は其の天女を見て、

「あなたは私の子になつて、何卒此の國に御留り下さりませぬか」と云つた。天女は答へて、

「妾はひとり此の國に取り残されてしまひましたから、おつしやる通りあなたの子になりませう。けれども先づ妾の羽衣を御返へし下さりませ」

と云つた。老翁は聞いて、

「此の羽衣を御返しすると、あなたは飛び去つてしまつてせう」と云うと、天女は答へて、

「此の國の人には詐欺の心がありませうが、妾達の天の國では皆清い心を持つて居ります。あなたは何故そんなに妾を疑うのですか」と云つてさめくと泣いた。

老翁は聞いて恥かしく思ひ、

「まことにあなたのおつしやる通りです。疑ひの心が深く信實の少ないのは此の國のならひです。私は自分の汚い心をもつて、あなたの清い心を疑つたのは過りでした」

と詫びて羽衣を返した。

天女は老翁と老媪に連れられて、其の家に行き、二人の子になつて棲んでゐた。

此の天女はまめくしく働いて二人を喜ばせた。そして此の世ではとても見られぬ貴い不思議な酒を造つた。此の酒はまことに不思議な酒であつた、それを盃で一つ飲むと、いかなる病氣も立ちどころに治つた。天女は此の酒を賣つてお金に代へて、二人の家を富ませた。かうして十年あまりも其の家にゐたが、老翁と老媪は始め程天女を愛して呉れなくなつた。そして毎に口汚く叱り罵つた。

「おまへはもとから私達の子ぢやなかつたのだ。暫の間養ひ子にしたのだから、もう何處へなりとも行つてお呉れ」  
斯う云つて天女をいぢめた。

天女はこれを聞いて、どんなに驚いたらう。そしてどんなに悲しんだらう。

「妾はあつしやる通り、あなた方の子ではありませぬが、あなた方が御願ひしたのでかやうに留つてゐるのです。それを今妾を追ひ出すとは、なんと云ふ

御心の變りやうでせう」

と云つて泣いた。

けれども邪険な老翁は聞き入れなかつた。

「いやなんと云つても、もう私の家に置くことは出来ぬ。早く出て行つてしまへ」

と怒鳴りつけた。

天女は力及ばず、泣く泣く老翁が家を出て行つた。しかし何處へ行かうのあてもなかつた。道のほとりに立つて泣いてゐると、里人が傍を通うた。

「あなたは何故そんなに泣いてゐるのですか」と問うた。天女は答へて、

「妾はながい間此の國の人となつてゐたので、今、家を追ひ出されても天へ上ることは出来ませぬ。親しい人もないので行く處もありませぬ。あゝ、妾はこ

れから如何したらいいでせうか」

と云つて、また涙をほろ／＼とこぼして泣いた。

天女は遙かに空を眺めた。碧い空に白い雲が浮んで、海のやうに美しかった。

天女はなつかしさに堪へず、空を見あげながら歌を詠んだ。

「天の原よりさけ見れば霞たち

家路まどひてゆくへ知らずも」

五六、處女松原

常陸の國に、をとめ松原と云ふところがある。昔此の國に那賀寒田之郎と呼ぶ男があつた。また海上安是之嬢女と呼ぶ女があつた。兩人とも容貌が世にすぐれて清く美しかったので、其の名は遠くまで聞えてゐた。

ところが此の二人は名を聞いてゐたばかりで、互に相慕ふやうになつたが、人

目のあるのに、互の心の裡を語る事が出来なかつた。そして味氣ない日を暮してゐる中に、ある日此の松原で歌垣の會があつた。多くの男女が入り亂れて互の心の中を歌つてゐた。其の中に男もゐた。また其の女もゐた。二人は相見てたとへやうのない程なつかしかつた。

其の時男は歌をうたつた。

「いやせるの安是の小松に木綿垂でて

吾を振り見ゆも安是こしまはも」

女は嬉れしさに答へた。

「うしほには立たむ云へど汝夫の子が

八十島がくり吾を見さばしりし」

かくて二人は思ひのたけを語らはうと、人目を忍んで歌垣の場所から逃れ、松の影がくつきりと濃くうつる、林の中に隠れて行つた。そして手を携へて松の

下蔭を歩いて、燃ゆるやうな胸の思ひを語つてゐる中に、早くも日は暮れて、集つた人々は皆歸つて行つた。浪の音響と松風の音のみ淋しく聞えてゐた。やがて夜になつた。空は清く澄み渡つて、月の光は晝のやうに輝いてゐた。二人は月を眺めては悲しみ、雁の聲を聞いては泣いた。そして花のやうに美しい二人は、夜の更くるのも知らずに、夢のやうな觀樂に身を投げ入れてゐたが、俄に鶏の啼く聲や、狗の吠ゆる聲などが聞えて來たので、驚いて起きあがる、とあゝもう夜は明け放れて、日はあたくかく照してゐた。二人は顔を見合はして泣いた。かゝる姿を人に見られるのが恥かしかつたのである。女は男の胸に身を投げかけて、聲を振はして泣いたが、男とても今更どらうすることも出来なかつた。二人は互に手を取り合つて泣いてゐると、其のまゝ二本の松となつてしまつた。男の松を奈美松と云ひ、女の松を古津松と云つた。

それから何年経つたらうか。二つの松の影は月のいゝ晩に、今でももつれ合つて泣いてゐると云ふ。

五七、茅輪と疫病

昔北海にやします武塔神は、南海の神の女の許にお通ひなされた時に、備後の國まで行かれると、日はとつぷりと暮れてしまつた。

其の村に蘇民將來と巨亘將來と云ふ二人の兄弟が住んでゐた。兄の蘇民將來は大へん貧乏であつたが、弟の巨亘將來は家も庫も多く持つて居て、此の地方で名高い金持ちであつた。

其の時、武塔神は弟の巨亘將來の家へ行つて、

「私は旅の者でござりますが、日が暮れて行くことが出来ませぬ。何卒今宵の宿をお貸し下さい」

と御願ひしたが、巨匠將來は情なくも断つてしまつたので、蘇民將來の家へ行つて御願ひすると、

「何もありませんが、何卒ぞ御泊り下さりませ」

と喜んで御泊め申し上げた。

貧乏な蘇民將來のこととして、栗柄をもつて御居間に敷き、栗の御飯をたいて饗應なした。武塔神はその後數年経つてから、八人の御子を連れてまた備後の國へ御出でになられ、蘇民將來の家を訪ねて、

「私は汝に御禮をするに來たのである。汝の家族は今家に居るのか」と問うた。

蘇民は答へて、

「女と此の婦と二人居りまする」

と申し上げた。

日本國民傳説（終）

「しからは汝達は早く茅輪を腰につけて居よ」

と教へたので、急いで茅輪を腰につけてゐると、武塔神は八人の御子と共に其の夜の中に蘇民將來と二人の女とを除いて、ことごとく殺してしまつた。

其の時武塔神は蘇民將來を召して、

「今は何を隠さう。吾は素佐之男命である。先年汝の家へ泊めてもらつた禮に疫病を免るゝ法を教へやう。それは「蘇民將來の子孫」と云つて茅輪を腰につけて居れ。そうすれば汝の子孫には決して疫病にかゝるものがないやうに取り計はうであらう」

と御教へになつた。

大正五年十二月二十八日印刷  
大正六年一月一日發行

日本國民傳説與付

定價金八拾錢

不許複製

著者 高木敏雄

著者 小笠原省三

發行者 櫻村喜久太郎  
東京市神田區小川町四十一番地

印刷者 高桑基次  
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

發行所

東京市神田區小川町四十一番地  
振替東京一二三三三六番

敬文館

(電話本局四八五五)

(刷印舍英秀)

東京女子高等師範學校訓導 堀 七藏先生著

# 賜覽台

## 少年理科物語

四六版上製  
定價金五十錢  
送料金六十錢

文部省通俗教育調査會御認定濟  
東京高等師範學校  
師範學校  
少年讀物調査書御認定濟

東京高等師範學校教授文學士 高木敏雄先生著

## 新日教育昔噺

四六版上製美本  
定價金六拾五錢  
送料金八錢

文學士 高木敏雄先生 共著  
小笠原省三先生

## 日本國民傳説

四六版上製美本  
定價金八拾錢  
送料金八錢

藤川淡水先生著 池田永治畫伯裝  
國定理科 小學理科  
お伽 五學年上下  
六學年上下

各册定價金三十錢  
送料各金四錢

警告!!

警告!!

果然! 偽物現はる!!

偽物現はる!!

偽物にも  
よないし

藤川淡水先生著と敬文館發行に御注意

國定修身書聯絡



池田永治畫

中版上製美本  
定價各册金參拾錢  
送料各册金六錢

學校家庭に於ける、補助修身とも稱すべき本書!  
時代の要求に適應せる、理想的課外讀み物!  
父兄保護者諸君は其の愛兒の爲めに一本を讀ましめ給へ!

359

又

# 少年少女諸君に

面白くて

爲めになる。

やすくて

きれいな。

誰れにも

読まれる。

よい本を

提供する。

藤川 淡水先生著 □ 論語お伽噺 定価金七拾錢

少年文學研究會編 ■ 新作お伽學校 定価金六拾錢

藤川 淡水先生著 □ 格言お伽噺 定価金五拾錢

堀 七蔵先生著 ■ 少年理科物語 定価金五拾錢

藤川 淡水先生著 □ いろはお伽四十八番 定価金八拾錢

現代教育研究會編 ■ 小國語漢文自習辭典 定価金四拾錢

あなたは何を讀んでゐますか？と聞かれて恥かしい様な本を皆さんは讀んではいけません。この本ならばお父さん、お母さん、學校の先生、其他どなたの前で見てもきつと喜ばれます。



357

211

終